

第12回「文芸思潮」エッセイ賞発表

第12回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇一六年度第12回「文芸思潮」エッセイ賞には、三〇四篇という多数の御応募をいただき、まことにありがとうございます。今回も十代の若年層から八十歳代の老年層まで幅広い世代から寄せられたばかりでなく、南アメリカやアジア、太平洋諸島、ヨーロッパなどからも御応募をいただき、国際的な広がりを得たコンテストとなりました。貴重な体験だけでなく、歴史としても重要な記録や、社会に対する鋭い批評も多く寄せられ、現代に生きる人々の様々な姿が反映された充実したコンテストとなりました。例年の通り、まず選考委員会予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって討議されました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞なども、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。御期待ください。

授賞式は、明年一月七日午後一時半より東京大田区民プラザで開催します。多数の御参加をお待ちしております。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「ドイツの血」

西本美彦 (滋賀県大津市)

「赤い眼」

本間淑子 (東京都江東区)

「兄と版画と中川商店」

金田一淳 (青森県三戸郡)

優秀賞

「還りこぬ木霊」 ならはたかし

(オランダ・S-H市)

「黒ダイヤの島」 宮本肇 (神奈川県相模原市)

「熱き再会」 高橋惟文 (山形県山形市)

「一個の握り飯」 本間 浩 (東京都府中市)

「母との約束」 大倉 六 (東京都府中市)

「母の手帳」 伊藤秋子 (東京都町田市)

社会批評優秀賞

「子宮破裂」 流川千里 (東京都町田市)

奨励賞

「氷解」 相原智記 (茨城県取手市)

「アルツハイマー病」 穂山和壽 (静岡県沼津市)

「祖母の火葬」 今岡静雄 (大阪府堺市)

「ハナチとの出会い」 山路貴美 (兵庫県尼崎市)

「飯山、そして残しておきたい和紙屋物語」

かのうけい (長野県飯山市)

「少女の汚れた手」 豊川亜紗 (東京都東久留米市)

「父の歩いた道」

森千恵子 (福岡県福岡市)

「ありふれた日々」

高橋直人 (北海道札幌市)

「父の選択」

土橋芳美 (北海道札幌市)

「デュラスの頃、時の傷跡」 日野笙子 (北海道札幌市)

「死んだ金魚は還らない」 早乙女加奈子 (東京都西東京市)

「母の思い人」 廣田瑞子 (神奈川県川崎市)

「熱血教師と英国紳士そしてバカ息子」

中村行寿 (岩手県滝沢市)

「顕微鏡」

磯山正玄 (茨城県石岡市)

「温かく命を育てる」

家森澄子 (岡山県倉敷市)

「誤解」

中田澄江 (山梨県南アルプス市)

「現代医学のお蔭だが」 前岡光明 (東京都町田市)

「庭」 いまだまりこ (広島県呉市)

「さみち抄」

南雲佐和 (神奈川県茅ヶ崎市)

「尺八の音が聞こえる」

林須磨 (京都府城陽市)

「笑い始めた君」

葵井禎子 (京都府京都市)

科学記録奨励賞

「帰ってきた発明」

田中英夫 (愛知県名古屋)

「金星―その謎に満ちた世界と、到達に成功した探査機の物語」

漆畑晨斗 (静岡県駿東郡)

社会批評奨励賞

内藤 誉（長野県上田市）

「与太郎考」

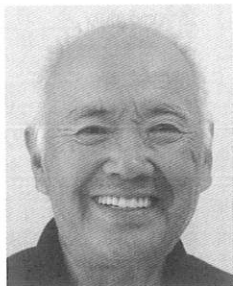
「過ぎたるは及ばざるが如し」

「保安係顛末記」

内山 正（栃木県さくら市）

ゴルビー長田（神奈川県横浜市）

選評



みずき りょう

1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で
第16回織田作之助
賞受賞
2006 小説「お見合いッ
アー」で第49回農
民文学賞受賞

語るべきを語る

水木 亮

第一二回を迎えた文芸思潮エッセイコンクール、期待して作品を読んだ。

私は、特に高齢者の方々の次代に伝えるべき、体験や熱い思いをこつこつを書き上げた作品に共感した。それは決して表現はうまくはないが、歳月を経てこれだけは伝えておきたいという気持ちに、改めて生きて共にあることの意味を感じた。「語るべきを語る」。多かれ少なかれ戦争の体験をした人々は、これを次代に伝える義務がある。来年もおおいにこのコンクールに参加し語って欲しいと思う。最優秀作品は三編あり、中でも本間淑子さんの「赤い眼」は、母親のことを書いているが、離婚した夫との人生を語る言葉が光る。本文が掲載されるので読んで頂きたいと思う。

また最優秀の西本美彦さんの作品は、書き慣れていて私には却って印象が薄い。

優秀賞の本間浩さんの「一個の握り飯」は、勤労学徒であった自分が、捕虜のイギリス兵に残りの握り飯を分けてあげたエピソードである。そのことを仲間に対する裏切りであると悩む姿が悲しい。庶民が戦争で体験したこの告白は貴重である。

同じく優秀賞のならばたかしさんの「還りこぬ木霊」は戦後のどさくさの中で、渡米し七〇年音信がなかった姉の最期の姿を書いた。ここにも戦争の影がある。姉が最期を尼修道院で迎えた。筆者がそこを訪ね、対面した尼さんの語る言葉に感動する。

き様、それが描かれていて感動した。

富嶽庵さんの「コレヒドールの海に沈めたもの」は、マニラ沖で戦死したAさんの兄の慰霊を実現した話である。再び日本にこういふ悲しいことがないことを祈りたい。

池山弘徳さんの「沖繩の少女」は、沖繩に転校した少女を介して、筆者の沖繩への思いがよく書かれている。

吉田宏子さんの「光りのビーム」は旅回りの役者に、大切に育てていたブタを殺された話である。人々に癒やしを与えるべき人物が、ブタを殺すという残酷なことをする。この明暗の対比がよく描かれていて悲しい。

上杉辰さんの「アルツハイマー病」は妻の病気について書いた。誰もがやがて自分の身に迫る話題で切実である。施設に入った彼女に、最後は自分なりの諦観で接する姿がなんとも胸をうつ。

今回のコンクールの作品は平均的に質が高いと思う。しかし、最優秀などは例年に比べて傑出した作品はなかった。来年を期待したい。

エッセイ賞 選評

そのほか私の心に残った作品を挙げてみたい。奨励賞の葵井禎子さんの「笑い始めた君」は、その昔の小児科実習の時の経験を書いた。病む子供との関わりの中で、自分のしたことが果たして正しかったかどうか。心残りが胸を打つ。エピソードがよい。

早乙女加奈子さんの「死んだ金魚は還らない」はうどんな屋のおばさんと、自分の悲しい金魚の思い出と、叱られた後の疎遠の心残りを書いた。金魚をとおして書いているところが映像的で印象深い。

椎橋萌美さんの「チーズタルトと掲示板」は、アルバイトをしながら生きる平凡な毎日を書いた。このエッセイの魅力は作者の物事を見つめるその視線だと思う。

友修二さんの「アクリルたわし」は、アクリルたわしという物を通して、それに寄り添う多くの人々の希望への生



佳作

- 「金魚」 田中浩司
- 「聖徳の王」 川西葉吉
- 「父のベレー帽」 中谷万勲 藤井典央
- 「アクリルたわし」 田中修 友修二
- 「ビールがまずい！」 横山佐敏
- 「あるカメラマンの『メール惚ぶ会』」 牧康子
- 「日本一周完歩・そして」 岩田アサコ
- 「あのときの、部屋」 佐藤義弘
- 「奇妙な病」 浜出羽志雄
- 「娘は境界域（ボーダー）」 菊池久雄
- 「脚本なき野外無言劇」 川添芳身 芳風
- 「一区間のキップ」 奥田登
- 「雨だれ」 瀧沢鈴
- 「ねづみ ねこ」 大淵勇 鷺津勇
- 「天職」 東フヂ子
- 「仏壇の中」 近藤幹夫
- 「それぞれのたわごと」 ナガツチヨ
- 「疑問」 寒川靖子
- 「命の終わりに」 小城ゆりこ
- 「地域で暮らして感じる事」 西条由美子
- 「私の中の彼」 清水久美子
- 「石ころたちの私語り」 赤井浩太

- 「漣」 井上理博
- 「刺しゅう」 坪井彰子
- 「娘の妊娠」 河上輝久
- 「従姉」 田中美晴
- 「魂を奪われて」 小野友貴枝
- 「光のビーム」 吉田宏子
- 「トリック時計のつくりかた」 千徒馬丁
- 「普通とは」 有澤かおり
- 「愚かなる夢追い人より、愛をこめて」 紗咲愛美
- 「コレヒドールの海に沈めたもの」 富嶽庵
- 「チーズタルトと掲示板」 椎橋萌美
- 「老人と雪かき」 北井正毅
- 「沖繩の少女」 池山弘徳
- 「大物たちの人情」 龍口宏
- 「ウシナウコトハカナシイコト」 彩野
- 「二十一分の七の家」 練早ゆきの
- 「石段にいた子供たち」 井上幸子
- 「山下峰次先生のこと」 森永昌雄
- 「映画友達」 八東一臣
- 「先生の後ろ姿」 屋技沼シン
- 「トメ」 稲垣ヨシエ
- 「記憶」 丸山史
- 「父と私と」 古川恋
- 「冬木立」 藤野和子



いがらし つとむ

力作ぞろい

1949 山梨県生まれ
79「流^{りゅう}瀆^{たつ}の島」で群像
新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売
新聞・NTTプリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

五十嵐 勉

第一二回のエッセイ賞は、応募総数三〇四篇と昨年より一七〇篇ほど少なかったが、内容的にはいい作品が多数集まり、全体的なレベルは上がっていた。特に三次予選を通過した作品の割合は前回よりもかなり高かった。最終選考にどれを残すか、入選レベルをどのあたりで切るか、佳作はどこまでにするか、この辺りの評価にはたいへん迷ったのが本音である。ある程度の水準に達して、捨てがたいものが多かったことから、入選、佳作の数も増えたことは必然だったことは報告しておきたい。

奨励賞、優秀賞のレベルは素材的にもよいものが多く、多くの人に読んでほしい作品が例年どおり揃ったと思う。ただ、飛び抜けて「これだ」という強烈な作品はなかった。

社会批評佳作

- 「電文」 吉田はるみ
- 「『居酒屋』のヒロイン」 山田まさ子
- 「思索の森へ」 華央子
- 「おばあちゃんのワンピース」 宇野陸
- 「首からエイを提げている女」 羽田スウ
- 「ネット世論」 友輝誠司
- 「環境問題への小さな実践」 後藤次郎
- 「日韓のしがらみ」 西島雅博
- 「小鳥に目覚め、月に遊ぶ」 末永卓幸
- 「自然とともに生きる人々」

代わりに、タイトルを変えてもらったり、少し補強してもらえば、最優秀賞として推せるという作品が二、三あった。今回の最優秀賞は各選考委員バラバラの推薦をなんとかまとめた形で、その結果が三篇の授賞となった。三篇は力の入り具合が特に際立っていたと言えるだろう。

西本美彦氏の最優秀賞「ドイツの血」は、幼くして日本に移住したドイツ人を母とする子供の自らの血に覚醒する成長記は、一つの宿命の下に生まれた人間の乗り越えなければならぬ内面のドラマを周囲の真の愛情によって成就させる内容で、国際結婚が増えている現代において、ありそうでなかなか書かれていない人間ドラマを描き切った

観がある。日本とドイツの二つの血が流れる自身の存在を、どのように位置づけ、どのような人間としての基盤を構築するか、特殊であればあるほど悩みや迷いは深くなるだろうが、その特殊性を自らの基盤として橋の役割を見い出すとき、いつそう強固な人間基盤が構築される。国際化の今、これは書かれなければならないテーマであり、多くの人が共有すべき内実を備えている。

本間淑子氏の「赤い眼」は、学生運動や同棲の波乱の青春を、家族から「勘当」を受ける試練を経て、結局離婚した現在の状況において振り返る構造を有している。家族との衝突を母親の「真つ赤な眼」に象徴させ、夏の百日紅の赤い花に重ねて、母親の思いを想起し、自身の燃える青春を追慕するストーリーは、青春の激しさを含んで迸るものがある。内面の嵐が文章に収まり切らないもどかしさを覚えるほど、滾り立つものがあり、それが母親の烈しい言葉「こどもを作るぐらい、犬猫でもできる!」とぶつかり合うところに、人生の悔悟を含んだ燃えたものへの振り返りがある。書かずにはいられない何かがこのには確かにあるのであって、今後これをどのように作品化していくかが、課題となっていくことも、露呈している。それはもともと長い作品によってしか真に結実しない予感もあるが、ひとまずの果実として、最優秀賞に値する。

同じく最優秀賞、金田一淳氏の「兄と版画と中川商店」

では違反行為であり、売国行為であるが、人間としての思いつから与えたそのことが、「プリーズ」「サンキュー」の応答となって心の中に響き合う。深い人間同士のやりとりが伝わってくるすばらしい告白である。しかもイギリス人の捕虜たちがそれを分け合うシーンや、筆者自身が戦後これまでうしろめたい行為として胸の中に取りめてきたという実直さが、この告白をいつそう実味あるものにしていく。「人間同士」の根拠を表している作品だ。

「母の手帳」(伊藤秋子)も戦争中の時点を基軸にしている。結核の体で子供を産み、自身はまもなく死に、子供だけを残す。成長した自分が、遺書としての母の日記を五十年後に読むという構成だが、死を越えて命を我が子に託す思いは、人間が繋げ貫く命の絆をあらためて浮かび上がらせてくる。人は何のために命を後世に託すのか、命を繋げるといふことはどういうことか——命の原点を照射してくる点は胸を打たれた。

「黒ダイヤの島」(宮本肇)は、軍艦島という炭坑島の戦前の実態を伝えた貴重な記録である。「黒船島」は今は観光地となっているが、日中戦争時代は重要な石炭生産地だった。しかし労働の苛酷さは、タコ部屋以上のすさまじさで、当時の石炭採掘労働の苛酷さを克明に映して、身の毛もよだつほどである。聞き書きと思えるがよくここまで聞いて記録したと感嘆する

は、プラモデルなど模型作りに耽った子供時代へのノスタルジアが美術教師の職業を選択させ、彫刻や絵に耽る芸術を開花させたその連結性を死期に及んで振り返り、人生の奥深い縁を浮かび上がらせる味わいに、深いものがある。おそらくこの年齢にならないと書けないものだろう。男の子の大半はこういう物作りに熱中した経験が一時期はあるもので、それが大人になってから「作る」「造る」「創る」という行為や仕事に繋がっていくものだろう。その道筋が鮮やかに見えるところにこのエッセイの味の深さがある。金田一氏は回顧の世界に澄んだ眼差しを向けて、詩情を鏤める作風に良さを感じたが、最近「死」の額縁に収めることのなかに、命の軌跡を辿り、その意味を掘削する方向に良さを示している。

優秀賞「還りこぬ木霊」(ならばたかし)は終戦の混乱期、米兵の愛人となった姉が出奔し、その後修道女となって病死する波乱の人生に最後に間接的に立ち会う流れは、劇的である。七十年会っていないかった時を経ての再会は結末の言葉とともにできすぎているくらいだが、ならば氏の人生そのものが海外に住む彫刻家であるという劇的な要素を持つことを考えると、納得させられる。ならば氏は自身を含めてこのことをもつと書く必然性があると思われる。

同じく優秀賞「一個の握り飯」(本間浩)は、戦争中イギリス兵の捕虜に、握り飯を与えた記録である。当時としては「母との約束」(大倉六)は、運動ニューロン病という全身の運動機能が失われる病気に罹った命のドラマで、やがて呼吸さえできなくなる致死の病の重さが、行間に響いてくる。母親の「生きなさい」という言葉を支えに、いまはすでに寝たきりになっている現在を生きている。「家族の存在が『生きる』力と勇気を与えてくれる」という姿勢が美しい。F1の細胞に新薬の開発を期待する導入も切実で、書かれている状況と態度は、耐える力と決然とした覚悟に裏付けられていて、すがすがしいものを感じさせる。勇気づけられるエッセイである。

「熱き再会」(高橋惟文)は、大学時代の全共闘運動への関わりを示した同級生との再会で、その契機を作った自身への悔悟を辿りながら彼のその後の人生を知る苦い青春回顧である。「赤い眼」と通底した当時の学生運動の熱気をどこかに孕んでいることと、一人の後輩の人生を大きく狂わせたと同時に自身は別の道を歩んだ後ろめたさを引き摺っているところに、陰りが薹の花のように咲いている。それぞれに持つ青春の過誤を味わい深く記していた。

社会批評賞優秀賞「子宮破裂」(流川千里)は、病院の陣痛促進剤の過量投与によって子宮が破裂し、そのため子供が脳性麻痺になって生まれてきた悲運を描いている。病院側のエゴイズム、訴訟を起こそうとしての敵味方の弁護士たちの功利的態度、その後の変遷などを通して、結局障

害を持ちながらも、生きて成長していく子供自身の姿に安らぎを覚える結末は、救われる。社会批判と同時に本質的な安らぎを書いたところに、このエッセイの重みがある。奨励賞のなかで特に印象に残ったものを挙げておきたい。「アルツハイマー病」(穂山和壽)の標識の読めない妻の高速道路侵入など病の危機感や圧巻で、愛妻のために会い(山路貴美)の老犬の生き方と自身の疎外を重ねる思いは深い共感を呼ぶ。「氷解」(相原智記)の父への反発から人生の道を踏み外した兄と、それから逃れるようにイタリアで生きる苦闘を選んだ自身の対比が人生の深い模様を織りなしている。兄と母の死を契機に日本に帰る姿が飛行機雲のように美しい軌跡を描いている。私は優秀賞でもよかったと思っている。「祖母の火葬」(今岡静雄)には、祖母への愛とその死を見つめる血縁を通じた固体の消滅への深いまなざしがある。死の露出が肉体のつながりの奇跡を浮かび上がらせる迫真力は賞揚したい。「父の歩いた道」(森千恵子)は戦争を扱った一冊の本から戦場で生きた父の現実を想起する真摯さが光った。「ありふれた日々」(高橋直人)は聴覚障害のある妻とペランダに巣を作った鳩の親子の交情があたりかきに溢れている。「父の選択」(土橋芳美)は優秀賞の「一個の握り飯」に共通した敵味方を越えた人間としての情が鋭く伝わってくる。戦

場で敵を殺せない一つの選択が真の勇気を伝えてくる。科学記録奨励賞「金星・その謎に満ちた世界と、到達に成功した探査機の物語」(漆畑辰斗)も、宇宙科学の現在の成果をスケール大きく描いて今回も壮大な夢を見せてくれた。「過ぎたるは及ばざるが如し」(ゴルビー長田)の戦争突入時の日本の姿への追及は、真剣なまなざしがあつていい。「誤解」(中田澄江)は、カナダに住む娘の夫と、母親である自分の関係が、障害者を思いやるはずの言葉によって誤解のしかかってくる。その打開の過程にカタルシスがある。「笑い始めた君」(葵井禎子)の小児生悪性リンパ腫を患った三歳の男の子は短い命を生きたいいけさに満ちている。わずかな遊びとそれによる心の交信に命の輝きがある。「さみち抄」(南雲佐和)も三代の母娘の運命を豊かな発想での形に鮮やかに描いて胸奥に流れ込んできた。「尺八の音が聞こえる」(直子)も兄の葬式に吹かれる尺八と松江の宍道湖の夕陽が相俟ってすばらしい景色を立ち上げていく。

「車椅子の私の旅支度」 鳩平和
「ふるさとの先人に学ぶ」 小笠原幹夫
「主婦と主夫の意味」 岩谷隆司
「きららの里」 小柳いすず
「トルコへの旅」 酒井恵三
「私の東京大空襲と父の思い出」 福岡千恵子
「肩書」 中村久美子
「私はあなたの左手」 西なぎさ
「声」 南条美起子
「今も台所が私の居場所」 「春雷」 「片付けようと思ったら」 谷和子
「先輩が行動で示してくれた教え」 迎博
「返り咲きの美学」 峰川修一
「4・5人を見る」 市原きみ子
「蛙の寺」 嶋津治夫
「警備業」 anachato
「母を看取る」 高橋登美子
「私は産めるのか」 星野夕子
「青山のおんな」 小嶋ひろ子
「心の声」 宮崎俊朗
「海翔ける馬」 辻岡真紀子
「障害を乗り越えて」 大空愛

「食べ物ブーム」 遊月飛鳥
「待つものがある幸せ」 斉藤はな絵
「四人の高二の仲間」 北洋一
「与太ビクとナズナ」 武藤蓑子
「どこまでが嘘か、誰も知らない」 雪村あかり
「それぞれでいいよ」 小関真知子
「無情の宴」 木下富砂子
「手話通訳をディセセント・ワークに」 横山典子
「ピエロにも恋してください」 すぎさち
「客家(ハッカ)の涙」 森崎律子
「スモークン・ブギ」 龍野 健
「晩秋」 きむきよんひ
「一服の清涼剤」 ピヨモグかあさん
「同じ空の下」 大西由紀子
「残念な墓参」 田窪宣彦
「うちのハククライ」 三宅直子
「青い写真」 長枝舞

入選

社会批評入選

- 「タラーク、タラーク、タラーク」 季那シャンカール

「姿」(屋技沼シン)は師への愛惜が老年の後ろ姿とともに染み付いてくる。社会批評佳作の「小鳥に目覚め、月に遊ぶ」(末長卓幸)は、現代文明のなかの便利さと多忙さのなかに埋没した我々の日常を根底から突き崩してくるような新鮮さがあった。まだ多数の捨てがたい佳作がある。エッセイ賞は、十二回を重ね、寄せられてきた作品総数は五千篇を超えるだろう。ここにある体験と人生の格闘と深い思いは、それぞれの命としてかけがえない個の輝きを示している。選考委員としてそれらに触れることで、人生の多様さ、深さに触れさせていきたい。これは無数の人生の重みを告げ伝えられた貴重な体験である。かくも人生は様々な苦闘と格闘に満ち、悲劇と奇跡と喜びに満ちているものか、その深さを教えられた。何ものにも代え難い体験である。これを経験させていただいたことに深く感謝したい。書き手の人生に心からの敬意と今後の人生の道への祈りを捧げたい。



みかみ ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生まれ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

記憶というものの性質

三神弘

最優秀賞の金田一淳「兄と版画と中川商店」は、子供の頃、模型品を扱う「中川商店」に足繁く通っては、模型飛行機づくりで熱中した兄弟と、その後の人生が回想されていく。「中川商店」が兄弟に物作りの喜びを教え、模型飛行機の飛ぶ空が、将来への夢を育んでいく。もとより人生の先行きは、模型飛行機の離着陸ほどに明らかではないが、兄弟は「中川商店」を「原点」として生きていく。

作品は、兄が彫刻や版画へと創作の幅を広げていく道のりを、そして「脳梗塞で創作不能となった失意の日日」を、弟の愛情のこもった眼差しで見届けていく。昭和三十年代の少年達の世界が、読者を誘う。模型キットの積み上げられた店内を、目当ての品を探して横歩きする兄弟の姿が、いきいきと描かれていく。歳を経てからの記憶のありよう、

意味、性質というものが、伝わってくる。

最優秀賞の西本美彦「ドイツの血」は「ドイツ人の妻と三人の子供連れで帰国した」父親の、子育て、日本での家庭の形成、周囲からの差別などを、日常生活の実感をとおして報告していく。たとえば、娘が海水浴へ行った絵を描くとき、一年前なら太陽を黄色いクレヨンで塗るものを、赤で描いているのを見て「日本語を第一母語として自然に受け入れようとしている」「日本人のアイデンティティが心の奥にしっかりと火を灯しはじめていた」と感じる。そして夫婦は「日本語を子供の新しい母語」として認めざるを得ず「ドイツ語を強制する」ことを諦める。

娘にも、葛藤があり、小学校に入学すると「美容院へ連れて行って、髪を黒く染めて。金髪で学校へ行くのはいや」と訴える。「いくら日本語ができて、周りの者に髪や肌の色などの容姿の違いを指摘されると、娘は「ガイジン」「ハーフ」として扱われ、日本人の世界から疎外されている」と感じてしまう。これらのことは、読者への問い掛けにもなっている。

この作品は、家庭、家族のありかたを示していて、かつ、現代があり、娘の成長物語にもなっている。大袈裟な身振りや、声高な訴えのないのがいい。ドイツ人の母親の意志と、態度も、読みどころだ。さらには、語り手である父親を、身近で、親しめるようにしたい。観察者としてだけで

なく、風貌が浮かんでくるような紹介、描写を望みたい。

最優秀賞の本間淑子「赤い眼」は、「絡み合う事情のために、看取することも見送ることもなく、母の死を受け入れた」という「私」の述懐だ。この母との確執は、若き日の「嘘でやり過ごした学生生活。学業不振、同棲、その結果の妊娠」をよみがえらせるとともに「こどもを作るぐらい、犬猫でもできる」と、激しく罵倒する母の声と形相を忘れさせない。「私」は勘当され、自立もできないままに、やがては、ひとりて子育てをしていく。

そして、歳を経てもなお、決して沈静化することも、薄らぐこともない過去が、記憶が、今日の我身への問いとして、さいなみ続ける。読み進めるうちに、むしろ悔恨こそが「私」の生きる糧であるともみえてくる。昨年の優秀賞の作者であり、いまだ作品は印象にある。なによりも、意識の持続が、文体の一途さとなっている。注目した作品をあげたい。

伊藤秋子「母の手帳」は、言葉の力、表現の意味、あり方、ということをおもわせてくれる。「私」は、父の遺品のなかからノートを見つけた。出征する直前に遺書の代わりにしたためられたもので、このとき「私」はずでに、母を病いで亡くしている。父のノートの冒頭には「秋子が大人になつた時、お母さんのことを尋ねられてもお父さんの記憶が薄くなつて話すことが出来なくなると申し訳ないから

思ひ出すままに書いておくことにした」とある。

ノートといっしょに母の遺した手帳が三冊出てくる。「私」が生まれてから一歳になるまでの丹念な育児記録で、「母の一生が簡条書きに記されていた」という。読者は作者の記述のあり方とともに、父の、母の言葉に、直接ふれることになる。ひとつの時代を生き、出会うこともなかった未知の人物が、声をともなつて、間近にせまる。

磯山正玄「顕微鏡」は、顕微鏡に夢中となった中学生の頃の記憶で、植物の茎や、川で釣ってきた鮎の鱗などを観察し、標本にしていく。標本は、草木の花粉、飼犬の毛にまで及び、身近なものが、顕微鏡をとおして、もうひとつの世界に誘っていく。自分の指に縫い針を突き刺し、「温かい生」にこころをうたれもする。未知なるものがあり、好奇心に憑かれ、顕微鏡を覗き込む少年がいて、その背中を眺める高輪となった今日の「私」がいる。

八東一臣「映画友達」は、すでに評価を得ている作者の作品だが、寡黙な父と農作業から解放されたいわば祝日に、唯一の楽しみである映画を観に行く話だ。喘息の持病のある父は、農作物を運ぶ自転車の荷台に座布団を敷き、息子を乗せていく。「その日の父は、決まって余所行きの服を着て、中折れ帽を被り、臙脂色の革靴を履いていた」という。映画館の暗闇で父の横顔をうかがう息子の描写に、情感がある。題名の「友達」は、検討したい。



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
 東海大学文学部卒
 2002 「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞
 「狼を見る」(文芸思潮)「ハネムーンきどり」(三田文学)他 短篇映画「ウミスズめし」(脚本)
 現在 TV のナビ番組などの構成作家としても活動中

乱戦と三題噺と おもんぼか 「慮る」という行為

都築隆広

接戦というよりは、乱戦であった。

応募作の平均レベルは軒並みはねあがり、ずば抜けた作品もまたなく、審査員達の推薦作も均等に分かれ「魏・呉・蜀」の三国時代の到来かの如く、三つの当選作が生まれた。私が推したのは「兄と版画と中川商店」。手先が器用で美術教師をしながら版画に人生をかけた兄と、「中川商店」という模型店の思い出が描かれる。地に足がついた語りもさることながら、題材に模型店を選ぶところがユニークである。少子化とゲーム機の普及によってこうした模型店は昭和の遺物として、過去の風景になって久しく、ノス

タルジー溢れるスケッチとして残しておきたくなった。同じく当選作の「ドイツの血」。ハーフの娘の反抗と和解、成長を描き、三つの当選作の中では最もエンターテインメント性があつた。描かれている時代の空気がそうさせているのか、非行に走る娘の姿は往年の名ドラマ「積み木くずし」を彷彿とさせる。ただ、娘をドイツに連れて行ったあたりから文章が駆け足になって、最後の一行はやや安直な気もした。改心へと繋がるドイツでの具体的なエピソードや娘の心理に関する言及がもつと欲しい。

学生運動の時代の同棲と妊娠、両親との対立を描いた「赤い眼」。高い文章力が印象的な秀作である。しかし、作中で母親が口にする、ある発言が引っかかった。エッセイとしては面白いものの、親子間でもこういう発言をするのはどうなのか？ 母親が激怒するのは十分、正当性があることだが、そのせいで読者が哀惜を感じにくい人物像になってしまったのは惜しいところだ。

優秀賞の「黒ダイヤの島」は軍艦島の知られざる炭鉱時代が描かれている。今や世界遺産にも登録された一大観光地で、我がボンド、「007」スカイフォール」でも悪党のアジトという設定でロケ地にもなっていたりもする。郷土史家書きそうな文章、という指摘が選考会でもあつたが、これも「中川商店」と同じく、消えゆく日本の風景として残しておきたい。

た作者による驚嘆すべきエッセイで、これまた必読だ。それにしても皆さん、エッセイストとしての手腕は十二分なのに、どうして内容と乖離したタイトルを付けてしまうのか。「保安係顛末記」なら「万引きGメン」の話だと読者は感じるだろうから、それをタイトルに入れた方が(少々、ダサイかも知れないけれど)ピンときそうなものだ。

題名に迷ったときは、落語の三題噺方式を取り入れてみてはどうだろうか？ 本文中から三つのキーワードを抜き出す。もしくは最初から「三つの単語を主題に書く」と意識しておく。初歩的なテクニクではあるが、「兄と版画と中川商店」が当選作に入った点においても、その効果は侮り難い。

最後に、良くも悪くも悩まされた作品は優秀賞の「母との約束」。ALS(筋萎縮性側索硬化症)になった作者の体験が綴られている。正直、技術的には高度な文章のエッセイではないのかも知れない。本来は書き手の背景などは除外して審査すべきなのだが、この短い原稿を書くまでに、どれだけの苦勞を作者が強いられてきたのかを慮るおもんぼかと、落選させていい作品とは思えなかった。

奨励賞・佳作では女流の活躍が目立った。少女ならではの残酷さを描いた「少女の汚れた手」と「死んだ金魚は還らない」はいずれも繊細な感性で綴られた文章で、才気が感じられた。「デュラスの頃、時の傷跡」はデュラスを読む・観るにあたってのガイドブックの役目をこなしながら、作者の乱れた生活が見え隠れするところがデカダンスで小気味良い。対して、常連の山田まさ子さんの「居酒屋」のヒロインはゾラをテーマに書かれた作品で、これまた駄目人間達ばかりが登場し、さながら下流の宴といった様相を呈す。「デュラスVSゾラ」という構図に持っていきかけたのだが、この二作を推す人が少なかつたのは残念だ。社会批評奨励賞の「保安係顛末記」も万引きGメンだつ

Essay

ドイツの血

第12回
文芸思潮
エッセイ賞
最優秀賞

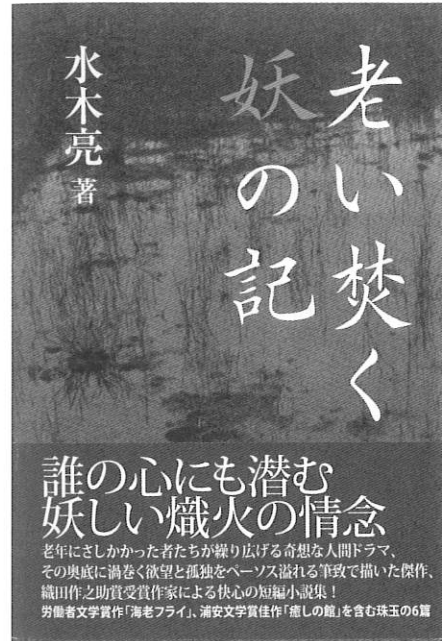
ドイツ留学を終えて日本に帰ったのは一九七一年の春先であった。ドイツ人の妻と三人の子供連れの帰国である。まだ乳飲み子であった末の娘をのぞけば、五歳の息子と四歳の娘は妻と同じように生粋のベルリンなまりのドイツ語しか話せなかった。

四月に入ると上の二人は京都市内の保育園に通いはじめた。いきなり日本語だけの環境に放り込まれたが、やはり子供である。周りにあらがうこともなく、本能的に日本語の中に溶け込んでいくだけであった。

保育園に通いはじめてひと月ほど経った頃である。テレビで「仮面ライダー」を見ていた息子が日本語のテーマ曲に合わせて、「アーマイゼ、アーマイゼ……」と歌い出した。



選考会風景



西本美彦

「アーマイゼ」とはドイツ語 Amise で「蟻」のことである。息子が「アリ、アリ……」と歌っているわけは「仮面ライダー」のマスクを見てはじめて分かった。息子の言語脳はまだドイツ語が優勢である。それは複雑な喜びであった。娘が保育園の友達を連れてきて遊んでいるときに、妻がなんやかやとドイツ語で話しかけるが、娘はまったく返事をしない。妻のほうに顔を向けようとしてもしない。わざとドイツ語が分からないふりをしている。友達が帰ると、娘はドイツ語で激しく抗議した。

「友達が来ているときにドイツ語で話しかけないで！」日本語以外の言葉が分かることさえ、周りに悟られたくないのである。

半年ほど経ったときである。テレビで「仮面ライダー」に見入っていた息子が急に立ち上がり、両手をぐるりと回して、「ヘンシーン（変身）」と大声を上げたばかりではなく、曲に合わせて、「迫るシヨッカー 地獄の軍団 我らをねらう 黒い影……」と間違ひなく日本語で歌い続けたのである。この瞬間息子の母語が猛スピードでドイツ語から日本語へ「変身」していることを認めざるを得なかった。息子も娘も日本語を第一母語として自然に受け入れようとしていることは現実であった。自己表現や伝達手段としての日本語の習得とともに、日本人としてのアイデンティティーが心の奥にしっかりと火を灯しはじめていた。

一年近く経った夏休みのことである。娘は画用紙に海水浴に行ったときの絵を描いていた。青々とした海原、白い雲が浮かぶ大空、カラフルなヨットの帆、子供たちが浮き袋につかまり泳いでいる。その空には「太陽」がまさしく「真っ赤な」クレヨンで描かれ、太陽からは赤い光線が数本放たれている。一年前の娘であれば、真昼の太陽を「黄色」のクレヨンで描いていたはずである。ドイツ語では真昼の太陽のことを「黄色い太陽」と言う。「黄色」は「まぶしく輝く」ことを意味している。日本語の「赤色」も「赤の他人」という表現に現れるように「まったくの」とか「はっきりした」ということを意味していることである。輝

本語を母語として習得させることが大切だ。どうしてもドイツ語で話したければ、大人になってから、外国語として学べばよい、と思った。

「今すぐ美容院に連れて行って髪を黒く染めて！ 金髪で学校へ行くのはいや」

小学校に入学してまもなく娘が訴えた。周りの者に金髪であると言われると、気持ちの上で日本人とまったく同じであると思ひ込んでいた本人の意識があっけなく拒否されたことになる。

「ママだって、子供の頃はブロンドだったわ。でも、大人になれば次第にブラウンに変わるのよ」

「じゃあ、黒い髪のかつらを買ってきて。それをかぶって行くから」と言ってきた。

いくら日本語という言葉ができて、周りの者に髪や肌の色などの容姿の違いを指摘されると、娘は再びガイジン（ハーフ）として扱われ、日本人の世界から疎外されると感じてしまう。自分のアイデンティティー、心のふるさとが崩れおちてしまう。一生涯、半分外国人であるとい宿命を担い続けなくてはならないのである。

娘が中学校に進んだときに、ガイジン呼ばわりされることに強烈に抵抗し始めた。原因はやはり金髪である。教師や周りのクラスメートの間で、娘が「茶髪」に染めている

く太陽を言い表すドイツ語の「黄色」も日本語の「赤色」も単なる色の名前ではない。娘が「太陽」を赤色で描いていることは、娘の言語脳が周りの物事を日本語独特の表現法で切り取っていることになる。それだけではない。真昼の太陽を「赤い」と表現する日本語そのものが、娘に「赤色」のクレヨンを選ばせている。

私たち人間はその言葉が作り上げた世界、現実をつなぎ止める母語という中間的な世界に身を置くこと、つまりその言葉で周りの世界を把握することによってのみ、その言葉を真の母語として用いることができる。日本語を駆使しているつもりでいるが、実際にはその言葉が定める世界に拘束され、支配され、行動させられているのである。

妻と私は、子供達が習得していった日本語を子供達の新しい母語であると認めざるを得ない時期が来たと思った。ドイツ語を強制することを思い切つてあきらめ、すべての生活領域で日本語だけを使用することに決めた。確かに「外国語は力である」とか、「バイリンガルだと役に立つ」とか言つて、重宝がる傾向が世の中にあるが、子供を理想的なバイリンガルに育てるにはそれなりの環境が求められる。また中途半端な「セミリンガル」に育てて、ドイツ語だけでなく日本語での思考も感覚も表面的で薄っぺらなままに留まり、言葉を持つ深遠な意味を感じとれない言語脳の間人になつてほしくなかった。子供達にはともかく完璧な日

という噂が流れた。七〇年代の終わりの頃には、髪を染めている者はまずいかなかった。担当教師の口からも、「茶髪の子ははじめてだ」と直接言われた娘は、ありとあらゆる非行行為で、暴れ出した。

まずは登校拒否、しばらくすると常習的となった万引き、タバコ、数日間にも及ぶ無断外泊、まぶた全体を真っ黒く塗つたアイシャドウ、ちりちりに縮らした髪の毛、そしてはついにシンナーにまで手を出していた。隠れてシンナーを吸い、一日中「ゲー、ゲー」とつばを吐き散らしていた。仕事が早く終わり帰宅したときのことである。自分の書齋のドアを開けて愕然とした。床の上は足の踏み場もないくらい書棚の本が撒き散らかされている。一部は数頁が引き裂かれ、ゴミのように放り捨てられている。それもドイツ語で書かれた本だけである。日本語の本には手を付けていない。私はまっすぐ娘の部屋に行き、せせら笑いをしながらタバコをふかしていた娘の頬を思ひっきりひっぱりたい。娘はただ「ふふッ」と漏らして、私の顔を上目づかいににらんだ。

穏やかに話しかけても、厳しく説教してみても娘には何の変化もなかった。学校へも行かずに一日中自分の部屋に閉じこもり、むんむんとしながら、自分の体内に悪霊のように巣くっている「半分ガイジン」という癌細胞を呪っている。ついには母親に対しても食つてかかる。

「あなたは百パーセント、丸々ドイツ人だから文句ないでしょう。私は半分ドイツ人よ。なぜ日本人と結婚したの」この言葉に絶句した妻は、「もはや理屈の問題ではない。娘には、まさに半分ドイツ人であることを肌身で感じ取らせて、認めさせるしかない」と断言した。

夏休みに入ると同時に、妻は有無を言わず娘を連れてドイツに渡った。ベルリンでは、ドイツ人の祖父母と妻の妹たちが娘を出迎えた。嫌がる娘の手を掴んで毎日のように、娘と関わりのある人や場所を訪ねていった。娘が生まれた病院の産婦人科、親子五人で住んだおんぼろアパート、娘を預けた子守のおばさん、大雪の中襦で通った保育園と保母さんたち、近くのおもちゃ屋の老人とアイスクリーム屋のおばあさん、空襲で吹っ飛んだ住宅の跡地に造られた質素な砂場。思いつくところ、行けるところは徹底的に足を運び、娘の頭に生のドイツを強制的に焼き付かせた。妻と娘はその八月の末、心底疲れ果てて帰国した。

妻と私は覚悟した。「自分の人生をどう生きるかは自分で決めさせるしかない」と。もはや非行を咎めることも止めて、娘の行動にいつさい干渉しない方針を貫くことにした。

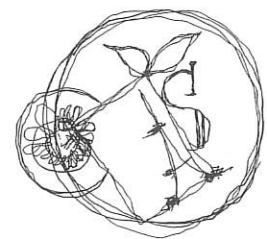
非情な時間が流れていったが、娘にはなんの変化も起こらなかった。娘は高等学校に進学した。いつの間にか無断外泊とシンナーは止めていた。あつという間に卒業が迫っ

ていたが、娘の進路は決まっていなかった。

十二月のはじめ、朝方から初雪がしきりに降り出した。娘は居間の窓辺に座り込んで、珍しく読書に熱中している。ここ何年も見たことのない光景であった。不思議がっている私の耳元に妻が小声でささやいた。「あの娘、昔買ってあげた『グリム童話』の『いばら姫』を読んでいるわ。いったいどうしたわけでしょう?」

庭に散っていた枯れ葉も純白の雪にすっぽり覆い隠された。雪雲が遠ざかると、青空がぱつと一面を照らした。まぶしく輝く雪を神妙に見つめていた娘は、なにかを想い起こしたかのようにスクッと立ち上って、頷くような仕草をした。階段を一段一段踏みしめるように登りながら、周りの者にもわざと聞こえるような声で独り言を言った。

「わたし、文学部でドイツ文学を専攻しようかしら!」



受賞の言葉

西本美彦

このたびはエッセイ賞最優秀賞をいただき、心からお礼申し上げます。受賞のエッセイは、ドイツ人妻との間に生まれ就学前の子供達をバイリンガルに育てることが、親のエゴだと気づき、日本語だけを新しい母語として習得させたことから生じたさまざまな葛藤を描いたものです。日本語と英語を流暢に話す外国人やハーフのタレントをテレビなどで観察していると、彼らは本当にバイリンガルなのか、それとも簡単な日常会話しかできないセミリンガルなのか、気がなりました。それがこのエッセイを書くきっかけになりました。文芸思潮に最初のエッセイを送ったのは、四年前です。その時は奨励賞、続いて優秀賞、奨励賞そして今回の最優秀賞と幸運な受賞が続きました。青春時代以降完全に眠っていた文学への関心を再度目覚めさせてくれた文芸思潮の先生方には心から感謝します。



西本美彦

にしもと よしひこ

1941 高知県生まれ
61 - 71 ベルリン・フンボルト大学文学部言語学科比較言語学専攻
71 - 2011 大学教員
2011 より無職

雪解霽
神通明美

銀華文学賞奨励賞受賞

人は法の裁きによって冷厳にのみ処理されるものなのか。法廷の場で裁断される人間が、苦悶し、叫びをあげる。その生身の声がここにある。裁かれる人間——その妻に肉迫し、叫びと真の思いを描く法廷文学。法と人間の狭間を鋭く突く新鋭小説集

1600 円 (税別/送料共)

バブルの残照
清松吾郎

バブルの開発ラッシュは人を狂わせる……
土地には地霊が溜み、代々の人間が心血を注いで守り育てて来た土地を、いたずらにいじりまわし、迂闊に利用しようとするれば、必ず災厄が降りかかり、その人間を危機に陥れる——土地の開発では人が死ぬ……

1700 円 (税別/送料共)

御注文はアジア文化社まで

赤い眼

本間淑子

二〇一一年、年が明けて早々に離婚した私は、四十年余りの結婚生活を、老犬の身震いのように振り棄て、唐突に独りになった。三月、東日本、東北を大地震が襲う。突然の津波に翻弄される悪夢のような現実が、映像を通してリアルに目の前にさらされ、日本中が、世界の多くが、その苛酷な光景に心を揺らし畏れ慄いた。無数の死をもたらした、無慈悲な自然の猛りへの悲憤。それが、夏の大気をも狂わせたのだろうか。

その夏はことさら暑く、容赦ない熱線が鑄潰すように、意地悪く照りつけた。車窓から見る風景を、心の起伏をなだめるかのように、ひたすら目を凝らして眺めていたものだ。通り過ぎる大学の百日紅の木々が、紅色を濃くした花群を緑の葉の中に際立たせ、一日の暑熱を予感させるよう

えるだろう。「いつまでも私、突拍子もないよね」気配に向かつて胸の中を言葉が駆けめぐるのであった。

二十歳のときの正月の出来事が、痛みと共に思い出された。両親を動転させ、私自身の生きる方向を決めさせた騒動の細部が、記憶の中からよみがえってくる。

当時大学三年だった私は、専攻した学科に興味を持ってず講義も休みがちで、低下する学力と意欲に閉塞感を感じ、葛藤していた。一年以上続く同棲の日々の楽しさとは裏腹に、なにかに惑い彷徨うような、整合性とは無縁の青春の中にいた。

学生運動の高揚した時代のこと、多くの思い込みや衝動、若い正義感に引きずられるように、その周辺を漂っていた。あっけなく敗退した一晚限りの学内占拠騒ぎは、思想性も覚悟も意志さえも、いい加減で浅くてもろいという事実を、自分に突きつけた。深まる混乱にさがっている状況での妊娠は、私が迎えた最初の分水嶺だっただろうか。混沌の中で体験するこの自然の摂理が、かすかな先の希望を与えるようにも思えたものだ。

産むことを決めたとはいえ、大学をやめ記録映画という未知の世界に踏み出そうとしていた彼にとつて、仕事も「親になること」も、すべてが初めての、しかも同時に起こったことであり、無知な私たちは、これから先の諸々をイメージする具体性を持たなかった。

に、ざわつき茂っていた。滾るような百日紅の色は、遠い昔の泣きはらした母の真つ赤な眼を想わせた。

お盆のさ中の午後だった。日当たりの悪い古アパートの私の部屋も、暑気からは逃れられず、じつとりとした空気を扇風機の風が動かしていた。睡魔の誘いに落ちかけていた耳元で、かすかに声があったような気がする。

「そら、みたことか」——思いがけない母の声。母らしい苦い物言いに、不思議とも思わず、私は応えていた。「だいたいしょうぶよ、私。生きていけるから」

十三年前亡くなった母。絡み合う事情のために、看取ることも見送ることもなく、私は母の死を受け入れた。無分別で勝手すぎる娘は、自分なりの理屈も理由もあつたといえ、ほとんどの場合、母を悲しませ心配させて来たとい

親元が遠いのをよいことに、嘘でやり過ごした学生生活。学業不振、同棲、その結果の妊娠を、両親にどう告げたらよいか、逡巡しながら先延ばしにしてきた帰省だった。

降り立つ新潟駅は、大晦日の闇に舞う細かな雪を、街路灯の薄い光がはかなげに照らしている。久しぶりに会う両親の手放して喜ぶ顔が、屈託の中の私にはまぶし過ぎた。

ふさぐ心は新年の晴れがましきには不似合いで、これ以上の嘘を重ねられず、私は一気にすべてを告げるしかなかった。タイミングも「場」も配慮できないくらいに、過飽和に近い心理状態だったのだろう。暗転するように宴の席は凍りつき、それからの大騒ぎは、今思い出しても身がすくむようだ。

「こどもを作るぐらい、犬猫でもできる！」

驚きで形相が変わる母の言葉だった。激しい声で罵倒する、制御できない母の怒りは、その険しいまなざしから射殺すように突き刺さる。父の苦々しい声の響き。当然過ぎて言い訳もできない。アルバイトと奨学金で学生生活の半分以上を賄っていたとはいえ、授業料や学期初めの書籍代など、大きな学費はすべて親掛かりの状態だった。自立できていない娘の無軌道ぶりは、両親の想像をはるかに超えていたことだろう。彼から話がないことが、さらに怒りを増幅させた。弟たちは隣の部屋に退散し、緊迫した雰囲気、息をひそめて成り行きを見守っている。

父母にとって、望んでも果たせなかった高等教育だった。時代の風潮、貧しい暮らしのために、進学への淡い希望は打ち消され、ひたすら働いて来たという。三人の子ども、老いたふた親を抱えた両親にとっては、長女の私が高校卒業後就職を選んていたら、家計も気持ちもどれ程助かったか知れなかった。たまたま進学を可能にする成績が、親にも私にも夢を見させ、無理を押しして大学に進ませてくれたのだった。

その夜は遅くまで、飲めない母が一升瓶を抱え、無理やり流し込むように酒を煽り続けていた。泣きながら悔しくつらい思いをかき口説く声が、廊下をはさんだふすま越しに聞こえて、布団の中で身をすくめながら、絞めつけられるような痛さで過ごした長い夜だった。

母の悔しさも悲しさも、その頃の私がどれ程分かっていただろう。「こどもを作るくらい、犬猫でもできる」と言い放った母の乱暴すぎる言葉は、宿った命を汚されるようで、その抵抗感、反発心が、落ち込みそうになる自分を奮い立たせたような気がする。非はすべて私にあるのだから、わがままな理屈なのだろうが、新しい命は誇らしく生まれ来て来てよはずだと思つた。母のこの言葉への反発、拒否の感情が、それからの人生の様々な局面や状況の中で、その都度起き上がり、難問を乗り越える力となって、子育てを全うさせたように思う。

ち時間を、一緒に過ごすことが多くなっていった。大腿骨の骨折で歩行が困難になった母と、肺に持病を持つ父の、介護と暮らしを支えるための同居は、親不孝な私にできた、わずかな年月のささやかな手助けだっただろうか。

錯綜する事情のため上京した二年後、四十九歳の誕生日に、母の急死を私は知らされた。この世に初めて命を生み出した日と、自らの生を終える日が、長い時を経て重なり合った偶然。重い余韻を私に残し、母は亡くなったのだ。

「いのち」を生み、育て上げ、次の「いのち」に繋いでいくことは、広大な流れの中の一存在として、飛翔する輝きを放ちながらも、恐ろしいほどの重さを抱えさせる。生を享けることは、混沌の坩堝に投げ入れられるようでもある。「ひととは何か」——疑うばかりの世の中の仕組みやその歴史。人間の本性そのものが、生きる程に分からなくなる。関係も状況も、自らを支える価値観さえも、常に変質し姿を変えていく。

時代背景、個別の状況に影響されながら続く子育て。戸惑いつつ親になり、成長過程で発する子どもたちの、点滅する信号のような心身の声に、葛藤しながら親として育てられていく。思う通りにならない他者を未熟なまま引き受け、答えを持たないまま振り回され格闘する。子どもが飛び立つとき、注いできた眼差しが真実がさらされるような親とは途方もない役割を担うものらしい。「命をまっとう

撮影準備、未経験の助監督をこなすのに苦勞していた彼は、「落ち着いたら、時間をもらって話に行こう」と言っていた。けれど葛藤の激しい私の感情がその時を待てず、事態を混乱させてしまったのだ。取り乱す私からの連絡で、翌日東京から駆けつけた彼は、両親の前で頭を下げた。「必ず幸せにします」それが、精一杯の約束だった。

しかし親の怒りは治まらず、彼の前では勘当を告げられた。夕方、両親の家を出た私たちは、鈍色の空から降る粉雪を、髪や肩にまとわせながら、茫漠とした未来に踏み出したのだ。不安と希望が交錯する昂ふりと緊張で、寄り添い歩くふたりは、たくさんの痛みを父母に与えて、新しい出発をしたのだった。泣きはらした真っ赤な眼をして、湧き上がる想いを振り切るように、母は無言で見送っていた。

それから、このような私を見守り、時には手を貸し助けてくれた母だったが、芯のところどう考えていたかはわからない。尋常小学校の時の父親の死で進級も諦め、十代初めから女中奉公に出て、結婚までの十数年を他人の家で過ごした母には、私も彼も苦勞知らずの甘ったれとして映つたに違いない。奥歯を噛みしめて、人生の理不尽さに耐えてきた母だった。

心の強い母も、六十代から患った病のため衰えを増していき、当時近くに暮らしていた私は、毎週の病院通いの待に育て上げる長くて重い時間を、苦勞知らずのお前に覚悟できるか」と、厳しく問うたあの時の母だった。

夢見がちな私の内面のもどかしい希求に、潤いや刺激を与え、未知の文化を垣間見させ、何かしらの思考の蓄積を促してくれたのが、ある時期までの彼だったということ、母は分かってくれるだろうか。親の世界や文化、価値観から飛び出し、混沌の未来を手さぐりしようとするのは、私の子ども達の歩みや視線の先にも、繋がるもののように思われる。

生きる覚悟と知恵や術を教え、距離を置きながらも支え続けてくれた母に、半世紀遅れの詫びと感謝を捧げたい。その夏の百日紅が、悔しさに泣きはらした母の赤い眼と、焼けつくような私の胸奥に通底する痛みの記憶をよみがえらせ、これまでの無謀な来し方が脳裏をかすめよぎるのだった。



本間淑子
 ほんま としこ
 1948 新潟県佐渡市に生まれる
 53～66 秋田県鹿角市に育つ
 69 東北大学文学部中退
 東京、福岡、大阪、新潟に居住
 95～東京都在住
 保育士、塾講師など様々な職業
 を経て、現在調理師として在職中
 2016 第11回文芸思潮エッセイ賞
 優秀賞受賞

受賞の言葉

本間淑子

長いこと胸にしまっていた母への想いを、ようやく言葉にできた作品が、最優秀賞に選ばれましたこと、戸惑いながら嬉しく思っております。またそれ以上に、受賞の重さを、緊張して受けとめています。

振り返れば、むやみに蹴散らして来た残骸ばかりが目につくような来し方ですが、「書く」行為は、そんな私の固い殻をゆつくりはがしてくれるようで、最近、少しずつ自由になっていく自分に気がつくのです。

文芸思潮のエッセイ賞に応募を続けて三年、それまで未経験だった「書く」ことを、その過程で、私なりに学ばせて頂いたような気がします。

審査員の皆様方のご評価を、身に余るものとして深く感謝し、頂いた大きな励ましに、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

Essay

兄と版画と中川商店

金田一淳

第12回
 文芸思潮
 エッセイ賞
 最優秀賞

「なあがあしようれんらろ」
 兄の言葉は呂律が怪しかったが、私の耳には「中川商店だろ」と聞こえた。頻繁に聞き返せば気に触るだろうから、適当に相づちを打ったり聞き流したりもしながら話をしてきたのだが、今のはわかった。語呂と抑揚が瞬時に記憶を呼び覚ましてくれたのだった。

「中川商店……。ああ、そうだ！ そうだったなあ」

思わず声を弾ませると、兄は首を傾げて斜め上を見上げた。それは何か想いに浸るとききの癖で、一瞬のときもあれば長いときもある。邪魔はせずに、私も同じであろう想いにしばし浸った。

中川商店。それは札幌市の狸小路四丁目にあった模型品の店だ。

入口は観音開きの木の扉で、上部のガラス越しに商品数の夥しさが通りからも見て取れた。中に入ると、戦車や軍艦などを陳列したガラス棚や、さまざまな模型キットの紙箱をぎちぎちと積み上げた棚が所狭しと並んで通路を狭め、目当ての品や掘り出し物を探すにも横歩きを強いられた。天井からは模型飛行機の完成品が十数機吊り下げられていた。

私たち兄弟がこの店に足繁く通ったのは昭和三十年頃だった。小遣いは微々たるものだったので、手先の器用な兄は竹とんぼや小凧や竹笛といったおもちゃを作っては近所の子に売り捌き、模型キットの購入資金を稼いでいた。中川商店に通い詰め、店長の昌三さんにしつこく技法を聞きながら、兄はたくさんの模型飛行機を作った。飛行機の



タイのすべてがここに
 特価 2000 円 (税別/送料共)



原石寛畢生の短編小説集
 1600 円 (税別/送料共)

御注文はアジア文化社まで

次は戦艦にのめり込んだ。バルサ材を加工して張り合わせ、艦橋や主砲塔・副砲台などを飾り付け、ラッカー塗装し、スクリューにモーターをつないで電池をセットすると、大通り公園や中島公園の池で進水させた。いつの間にか兄の机には学習用具が駆逐されて、長門・赤城・大和・武蔵などの戦艦が並ぶようになっていった。

私はというと、わずかな小遣いだけが頼りで、作る数が少ないので飛行機作りの技術は拙かった。竹ひごを曲げるときにロウソクの火で燃やしてしまったり、翼の形が歪になつたり、ニューム管をつぶしてしまつたりと、不器用な私は失敗が多かった。

だが、一度だけ兄の機を凌いだことがあった。翼に紙を貼り霧吹きするとまるでプラスチックと見紛うほどにビーンと張り、機全体がきれいな左右対称に仕上がった。飛ばすとスーッと上昇していき、風に乗って大きな弧を描きながらゆつたりと着陸した。

兄が大会に出ると勧めてくれた。滞空時間や飛行姿勢は入賞ものだと褒めるので、私はすっかりその気になり有頂天だった。大会の日、会場となる丘珠飛行場^{おかのま}行きのバスは満員で、通路に立った私は飛行機を網棚に落ち着かせた。やがて丘珠に着いたので網棚の飛行機に手を掛けたとき、中学生が私を突き飛ばして降りていった。飛行機を握ったままよろめいた私の耳に、天井にぶつかった翼のミシッと

昭和四五年夏、兄は青森市の棟方志功の家に押し掛け、数枚の版画を広げて見せた。志功はその中から秋刀魚の版画を手にして「ワイハー、このサンマ、ナンボ美味そだバ！」と褒めたそうだ。この瞬間、兄の胸には生涯版画の炎が燃え上がったに違いない。

以来、兄は右手に彫刻刀を握って彫り続けた。水芭蕉やフキノトウなどの植物に始まり、阿寒地方に赴任していたときは丹頂鶴や湿原を好んで彫った。個展も各地で開き、退職する頃からは「アイヌの守護神なんだ」と言つて、シマフクロウを彫ることが多くなった。

兄は札幌に行けば必ず中川商店に立ち寄り、店長の昌三さんとはよく思ひ出話をしたという。中川商店との出会いが兄を版画の世界に導いてくれたと言つても過言ではない。

美術教師を定年退職して七年目の頃、兄の音信が途絶えた。弟子^{てしかが}屈のアトリエで版画に没頭しているのかとも思ったが、四六時中留守番電話のままで、往復ハガキにも返信がなく、理解に苦しんだ。それが二年ほど続いたある日、やつと電話が掛かってきた。「脳梗塞で右手足と言葉が不自由になった」と、声が弱々しかった。兄は創作不能の失意の日々を送っていたのだ。義姉の介護でリハビリに努めてはいたが、二年後には義姉も脳溢血で意識不明の寝たきり入院となり、兄は自宅生活が不可能になった。弘前

いう悲鳴が聞こえた。

兄が手当をしてくれたので祈るような気持ちで競技に臨んだが、翼を骨折した機はカタカタと体を震わせながら、巻いたゴムが戻りきらないうちに滑走路に墜落した。

飛ばすまでもなく、入賞の夢は青々とした空の彼方に消え去つていったのだ。

「中川商店は物作りの魅力でいっぱいだったよな」

しばしの追想の後、兄はそんなことを言い、「あそこが俺の原点だ」と付け加えた。

昭和三五年、兄は札幌工業高校に進学した。しかし、病に倒れた父の療養のため一家を挙げて故郷の田舎町に引き上げることになった。小さな町に工業高校はなく、兄は普通高校に併設されていた木材工芸科に転入学した。熱心な教師の指導の下、制作した家具や木彫作品の多くが高い評価を受けるにつれ、兄は美術工芸に興味を持つようになった。教師も美大への進学を勧めたが、結局は経済的理由から千葉県の工務店に就職した。しかし、一度点した夢は捨てきれなかったのだろう。さまざま苦労しながら学資を貯めて武蔵野美術短期大学に入った。やがて教員免許も取得し、北海道で美術教師に採用されると、教職生活の合間に、ペーパーラフトや彫刻や版画へと創作の幅を広げていったのである。

市にいた一人息子が奔走し、津軽の老人ホームへ入居できたのは平成二五年九月のことだった。以来、私は高速道路経由で三時間弱の道を駆けて、二、三ヶ月毎に兄の居室を訪問するようにしていたのである。

中川商店の話題で盛り上がりから二ヶ月後に訪問すると、兄は画架にセットしたスケッチブックに向かっていて、倒れてからは日がな一日テレビを見ているだけと聞いているので驚いた。私に気付くと、兄は「ちょっと試していた」と照れ笑いし、「思うようにはいかないな」と鉛筆を置いた。左手に握っていたのはホルベインの4Bで、描いていたのは窓から見える岩木山らしかった。が、地震の最中にも描いたような震えた稜線はどうかするとあらゆる方向に走り、あちこちに無用の描線を残していた。

「岩木山だね。わかるよ」

気休めや慰めは不要と思いなながらも、とにかく何か声をかけずにはいられなかった。

「これじゃあ、彫刻刀はまだまだずっと先だ」

兄は弱音を吐いた。しかし、その横顔は久し振りに引き締まって見えた。

帰り道、見晴らしの良い所で車を停めた。辺りは一面のリング園。収穫間近のリングは誇らしげに色づき、蜜の香さえ漂わせている。紫色に秋化粧した岩木山が赤や黄もち

りばめて端座し、その裾野から渡り来る風はチェロの音色にも似た温かさで頬をくすぐっていく。兄が再び彫刻刀を手にできたら……。私は願を掛けるように岩木山を仰いでいた。

凍結道路を嫌って冬の訪問は控えていると、一月末に甥から遅い年賀状が届いた。賀詞のあとには「中川商店閉店のニュースを見て、父はスケッチをやめています」と書かれていた。閉店のニュース？ すぐにインターネットで検索して、一月十四日の朝に「中川商店が百十三年の歴史の幕を閉じた」というニュースが全国ネットで報道されたことを知った。それを見た兄は、一つの時代が終わったようなショックを受けたらしい。

気懸かりではあったが、気落ちした兄に向き合う勇気がなく、私は雪道や多忙を口実にして、月代わりの度に「訪問できず」のメールを甥に送った。

六月に入り、何気なくネット検索して驚いた。中川昌三さんの訃報が載っていたのだ。

中川商店は明治三五年に喫煙具の店として創業。終戦後に海軍航空隊から復員してきて三代目店長となった昌三さんが模型飛行機も扱い始め、やがて模型工芸品が主流になった。平成二〇年に引退したが、四代目の功清さんが急逝したため二五年に店長に復帰。二本の杖で体を支えなが

少しづつ少しづつ確かな描線になっていくのを見て取れた。うれしかった。兄は昌三さんから最後の力をもらい、版画への再起を夢見ながら逝ったのだ。

熱涙を感じて思わず閉じたまぶたの奥に、再び兄の姿が浮かんできた。

兄は、右肘で押さえた大きな版木に額を寄せて、左手に握った彫刻刀で一心不乱に彫っている。シユズツ、ツァリッ、ツズウーッ、と軽やかなリズムを刻みながら。



「今朝、父が逝ってしまった。脳裏に丘珠飛行場の空が広がり、その紺碧に吸い込まれるように兄は消えていった。」

斎場に駆け付けた私に、甥はスケッチブックを見せた。「せめて八〇歳までは頑張ってみると、倒れる直前まで描いていました」

順を追って捲っていくと、頼りなかった岩木山の稜線から店に立ったが病氣と高齢には勝てず、閉店を決意したのだ。連日名残を惜しんで多くの人が訪れ、在庫が激減したために一月末の予定を前倒しして、十二日に店を閉じた。そして、その二ヶ月後の三月十八日、昌三さんは世界したという。きつと解放感・安堵感・充実感に包まれながらの旅立ちだったろうと言われている。

私はそんな中川商店の歴史と最期をA4二枚にまとめて印刷した。兄がどんな心境になるかは想像できなかったが、区切りをつける必要を感じて、私は津軽に向かった。スケッチブックはやはり閉じられていた。無沙汰を詫び、中川商店の歴史を見せた。読み終えた兄は静かに首を傾げて目を閉じた。

会話が弾まぬままの別れ際、兄は「昌三さん、最後まで頑張ったんだなあ」と言った。

一〇月半ば、そろそろ訪問をと思っていた矢先に甥からの電話が入った。

「今朝、父が逝ってしまった」

脳裏に丘珠飛行場の空が広がり、その紺碧に吸い込まれるように兄は消えていった。

斎場に駆け付けた私に、甥はスケッチブックを見せた。「せめて八〇歳までは頑張ってみると、倒れる直前まで描いていました」

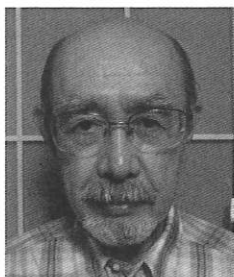
受賞の言葉

金田一淳

この度は最優秀賞に選んでいただきありがとうございます。二〇一一年の初応募で優秀賞。ビギナーズラックかと思いつつも、気を良くして毎年応募してきましたが、挑戦し続けて良かったと今はただただ感無量です。

五回目以外のすべての応募作品が、札幌で過ごした少年時代の回想録から題材を得ていました。六回目は模型飛行機で遊んだ頃を書こうと考えていた矢先、兄が亡くなりました。唯一の肉親の死で、取り残された思いに沈みましたが、模型に一番関わったのが兄だったことを思い出し、供養の意味合いも込めて兄の生きた道を書き綴ってみました。

文章表現の拙い私にさまざま教えてくれた友人O氏、そして数多くの優れた作品を掲載して執筆欲を刺激してくれた「文芸思潮」に、心より感謝しています。まもなく兄の一周忌。墓前に受賞を報告し、更なる精進を誓うつもりです。



金田一淳

きんだいち あつし

- 1946 青森県むつ市大湊町生まれ
- 70 弘前大学卒業、北・東日本各地でフリーター生活
- 75 青森県(下北郡・三戸郡)で教職生活
- 2006 定年退職し、年金生活に入る
- 11 文芸思潮第7回エッセイ賞優秀賞
- 12 文芸思潮第8回エッセイ賞奨励賞
- 14 文芸思潮第10回エッセイ賞佳作
デーリー東北新聞社コラム「私の天鐘」優秀賞
- 15 文芸思潮第11回エッセイ賞佳作

還りこぬ木霊

ならばたかし

日本のS区役所から一通の封書がとどいた。開けてみて中の紙面を見るなり僕は凝然とした。第二次大戦直後に生き別れとなったままの姉の消息だった。

小刻みにふるえる文字をひとつ、ひとつ、拾うように読むと『昨日、あなたのお姉さん、志保様が路上で転倒し、救急病院に収容されました。未だ意識がおりないので、下記に御連絡ください』と、電話番号が添えられている。

折り返し指定の市病院に電話を入れた。日本時間にして朝の一時過ぎだった。当直の看護婦がでて「せっかくですが、いまお繋ぎはできません」と言う。「なぜです、夜も遅いからですか？」急いで聞く。「いいえ、意識不明なので……」声のをんだ……。

進駐してきたものの、当座の勝手が分らない、それも飛行発着できる特殊な場に着目した米指令部は、終戦即時日本人各旧部員に部署の遺留を命じた。「志保さんもその中の一人だったわけです」と言った。「それにしても一種の捕虜拘留でしょう」母が言っても「何せドサクサの中、部員がそのまま散ってしまう恐れがあったのでしよう。ともかく米軍司令部の言うこととして……」後は何も言えなかった。

一ヶ月ばかり経って姉は膨らんだサックを手に家に戻ってきた。チョコレート、クッキー、缶詰、チーズ、ハムなど、戦後手に入らないものばかりだった。彼女は栄養失調ぎみの僕に比べ色艶が良く、キャンプで大事にされているのを物語っていた。「お仕事がいっぱいで……」そそくさと帰り支度をする彼女を見ても、家にホッとした空気がかえった。

日をおいて二度めに姉が帰って来たとき、その表情は明るくかやき、話もキャンプでの彼女への英語集中コース、仕事の手順、休憩の配分、殊に米人が女を立てるなぞ話がはずんでいた。

三度目に戻ってきたときだった。姉は金髪、カーキ色の軍服の米兵とともにジープを降り立ち、肩を並べて玄関を入ってきた。「プリーズ、カムイン」姉にさそわれるまま、ノッポの米兵は畳にぎこちなく立膝で座った。「この人口

終戦の詔勅を聞いてからも、学校に駐屯している本土決戦用補充兵の小父さんたちが行き場をはぐらかされてざわめきかえり、先生方がそれに巻き込まれて学業どころか、何もかも投げ出したような錯乱と倦怠感につつまれていた。だが、僕の家にはなお戦争の残り火が燻りたっていた。終戦日から五日も経つのに姉が学徒動員先の元飛行学校から帰宅せず、母と僕は入れ代わりに進駐してきた米軍キャンプに日参し、米兵の靴音に追いのけられて取えなくもどる日がつづいていたのだ。

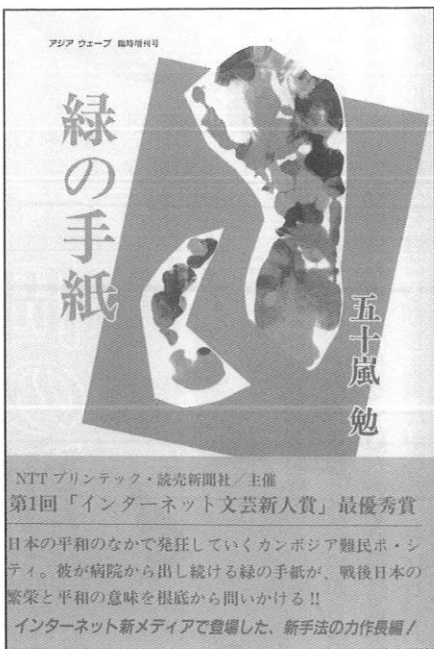
そこへ姉の学校の女子師範、教室担当と教頭が訪ねてきた。「私たちは米軍の指令で来たのですが、お嬢さんは米軍キャンプに保護され無事でいます」と、前置きしてから、姉のキャンプ拘束の理由を語った。——米軍が飛行学校に

バートと言ってね、ヒコキ乗り、とても親切なのよ」それからは持参の缶ビールをあけ、はしゃぎながら互いに流暢な英語で話しはじめた。僕はその開けすけな様子を啞然と見ていた。母は姉の通訳の合い間頬をほころばせ、頷いてみせていたが、脇に座っていた祖母は体をこわばらせ、膝の上の手がブル、ブルふるえていた。

次に姉が来たときだった。「お婆ちゃん、リキユールってお酒知ってる？」彼女がサックから小瓶を取り出そうとしたところ、「いいかげんにおし！」怒声が飛んで、土間に色とりどりのサックの中身がとび散った。「こんなもの貰ってきおって、お前ヤンキーと、つるんでいるのね！」立ち上がりさま、くの字の体から姉を睨みつけた。肝をつぶした彼女が悲しい顔で早々に立ち去る後姿を見て「ひどい！、あんなこと志保に言って、もうあの子帰ってきませんよ」母がうなだれるのへ「なにを言っているんです。あの子は売女です！」、それに次いだ言葉が母の顔色を変えさせた。「お前の血筋を引いているんですよ」

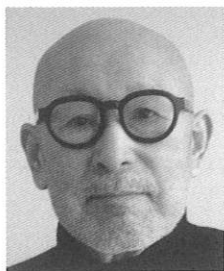
母は後日服毒して死んだ。敗戦後上陸する敵兵に備え、懐中していた青酸カリだった。

当初下志津原を背景に、この街四街道に騎兵（後に砲兵）学校、陸軍飛行学校の二つの軍事校があった。僕の母方の曾祖父は仙台藩で、乗馬の師範を勤め、その薫陶を受けた祖父は維新後、新政府に請われ、当時の騎兵学校馬



1700円 (税別/送料共)

御注文は折込葉書でアジア文化社まで



ならは たかし

- 1930 東京生まれ
- 55 武蔵野美術大学 洋画科 卒
- 68 第5回 インターナショナル青年美術家展優秀賞受賞
- 第4回 ジャパンアート・フェスティバル大賞受賞
- 75 スウェーデンに移住
- 96 スウェーデン・ロイヤルアカデミー芸術文化賞受賞
- ブルーデル美術館賞受賞 (フランス・パリ)
- 85~99 ギャラリー・デニス・ルネー (パリ) に於いて個展5回
- 1967~2005 その他、日本、ヨーロッパに於いて個展、グループ展多数
- 2006 オランダに移住
- 08~ バーゼル (スイス)、FIAC (パリ) などのインター・フェアにモニュメント彫刻 出品
- 2011 第7回「文芸思潮」エッセイ賞優秀賞受賞
- 12 第8回「文芸思潮」エッセイ賞優秀賞受賞 第9回銀華文化賞佳作
- 13 第9回「文芸思潮」エッセイ賞佳作 第10回銀華文学賞佳作
- 14 第10回エッセイ賞佳作
- 15 第11回「文芸思潮」エッセイ賞奨励賞

受賞の言葉

ならは たかし

エッセイは自分の追憶を気安く書くものと心得ながら、今回の応募作品は最も僕の書きたくない、それでいて何時か書かねばと心に引っ付いていたシコリのようなものです。書き上げてまたコンベに送るのも気が退けていました。正直のところ、受賞の喜びの涙が切なさのそれと胸につまされる思いです。

術教官をしていた。その妻の祖母は曾祖父の上司の娘で、れっきとした士族出を謳っていた。そこへ、母と水戸在農家出の父との恋愛が祖父の怒りにふれ、一時勘当をうけていた。戦前に父が病死し、母は姉と僕をとめない祖母の許に呼びもどされる経緯にあった。

その後、風の便りに姉が米飛行士と渡米したことを聞いた……。

僕は瞬時、掌中、支柱の珠をなくして茫然自失した。その地獄の淵から救ってくれたのは、画を描くのが好きだったことだ。——しゃにむに画を描きまくった。それを見ていた祖母は、僕を真新しい母の位牌の前に座らせ「これで東京の美術学校においてなさい」と、一通の封筒をさしだした。僕の名義入り銀行通帳だった。それを手に武蔵野美術学校に入った。

当時ヨーロッパからデモクラシーの新風とともに現代美術が颯爽と入ってきた時分、若い僕はたちまちその渦にまきこまれた。応募した美術コンペは微笑で僕を迎え入れてくれた。その賞金を手にヨーロッパへ発った。

姉の死後、彼女が最後に寄寓していた尼修道院をおとずれた。

昨日までのしとしと雨を忘れたようにカラリと澄みわたり、紅葉した楓脇の鐘塔が青空を突き刺していた。マリヤ

の影像のかかっている玄関先を黒い法衣の尼さんに導かれ、ステンド・グラス窓台の十字架のほか何も置かれていない質素な部屋に通された。

軽い挨拶のあと、姉の悲報に接しながら直参が遅れ、僧院の手厚い埋葬代行の札を述べながら、僕はテーブルの前の老尼に姉の面影を割り出そうとしていた。「お姉さんのことを想われておいでなのですね」その皺から言葉が漏れてきた。多分僕の眼が空ろになっていたのである。「いや、あのう……、それで、いつから姉はここに……」霞の中のうろたえから本音がつい口をついた。

「十五年になりますか」

「十五年も！ そんなに経っているのに、どうして姉は僕に報せてくれなかったのでしょうか。互いに外国で離ればなれだったとはいえ、戦後七十一年一度も会っていないのです。七十年もですよ！ いったい姉は……、どこで、何をしていたのでしょうか？」礼を忘れて畳みこむように顎をつきだしていた。「ずいぶんとご苦労なさっていたようです。それはイエス様だけが知りになっておられることです」

——僕が知ってるのは艶々しい姉だ。姉といえはその晴れやかな美しい顔が出てくる——お姉さんが黙りこくってきた長い長い空白は貴方への(慈悲)だったのよ」と、老尼の微笑みの皺が語っている気がした。

一個の握り飯

本間 浩

敗戦の日から半年間のことはほとんど記憶にない。ボツカリと抜けている。どうしたことだろうか。敗北感から奈落の底にあつて心の傷の痛手で伏せていたのか、呆然自失の果てに無の日々を過ごしてしまつたからか、それとも、空洞を埋める術を知らなかつたからか、いずれにしてもそれまでに目にしたはずの悲惨な事々を含め、意識してか、或いは無意識のうちにか、忘れようとしたのは疑う余地もない。

それに対して、敗戦の日までのおよそ半年間のことは、忘れようにも忘れられない鮮明な記憶がある。脳内細胞が記憶の喪失を拒み、かたくなに忘れることを阻み続けているのだ。

十五歳、多感の少年期の若々しくも愉しく辛く苦しかった日々の記憶が——時を経て、いま、先が短くなつた私を苛み、責める。許してくれと叫び、或いは哀訴するが、それがかなわない。生き、生かされている身に課せられた宿ス兵の捕虜が立っていた。背後には一群の捕虜たちがいる。工場の建物の裏手の、人目の届かぬ一隅での出来事であった。

その時、私は、勤労学徒として軍需工場に動員された中学生であつた。勤労動員の学徒や挺身隊員などの臨時従業員をまとめる人事庶務に関わる業務の補助員として働かされていたのだ。朝、就業人員を点検し、人数を報告して昼に特別配給される一人一個の握り飯を配るのも仕事の一つであつた。

それが、時に、配り出すと、どこでどう間違えたか不足することがある。そうなると大変だ。その事態を避けようと、二個か三個を余分に申請することを覚えてしまつた。余つた分は同じ学校からの同僚に秘かに回す。その行動は許されるものではないが、混乱している時と所だ、なぜか、罪悪感がとぼしくなつていった。誰もがひもじいおもいをしていて。ましてや学業ならぬ慣れない労働下でのことだ。少しはそれを癒してやってもよいと思つても不思議でなかつたし、喜ばれもした。さらに、正直にいうと、そのことは善意だけの行為ではなく、体力のない私とその役得で優位に立つて、^{あつか}抗い難い力の同僚に対しての、保身の手段にしていたことも事実であつた。

ある時、その行為が枠からはみ出てしまつたのだつた。願せ細つた哀れな姿——囚われの身で自由が得られず、願

命として受けなければならぬ責め苦かもしれない。あえて、ここで目を瞑しその時の事を告白する。命の尊さを再度心に教え込ませる。もつてして、そこで生涯を閉じたい。

その時は、一瞬のためらいがあつたが、私はあつてはならない行動をとつていた。捕虜の一人に、一個の握り飯を手渡したのだ。小さく「プリーズ」といって。

一瞬、信じられないといった彼の表情にとまどいがあつたが、のちに私の表情を読み、判ると眼がうるおい、低く応じた。「サンキュー」

昭和二十年七月のある日。

日本海岸沿いのJ市の夏空は蒼く、高く、焼きつける暑い日差しが工場（N特殊製鋼）に照り付けていた。

小柄の私の目の前に、身にボロ布のような夏の軍衣をまとつた長身痩軀、白い肌色から生気が失せた碧眼のイギリイもかなわず、努力も封ぜられた身上の捕虜の姿に、目線が合ったのだ。子供心にも、ふと、仏心らしきものが湧いたとでもいうのだろうか。彼らの日常の食べもの事情のおよそを知っているだけに、ひもじい思いをしているはずだと——。

私たちが屋外で特配の握り飯を食べているのを横目で見ていた彼らの姿に、思わず近寄つて一個の握り飯を手渡していたのだ。

「プリーズ」返して「サンキュー」が交わされた。

正直、その時には敵意が失せ、同情の念に置き換えられていたようだ。彼らも人間。人と人との対等の立場を意識した。心を、情けを与える。その時、戦地で戦っている同輩と戦士たちの姿が念頭から失せていたのだ。見つければ大変なことになるという恐れさえ忘れて——。

後になって思い起こすと、私の脳裏に、矢継ぎ早に思いが交錯する。「戦友たちを裏切つた」「申し訳ない」「悪いことをした」「利敵行為」「人命を重んじた」「許される」「許されない」「叛逆」「善意」「戦死した英霊への言い訳がたつか」「敵に塩は上杉謙信の教え」「飢えに人種はない」「命を救う」「仏心」など等——。

以来、善悪の判断が錯綜する歳月が続いている。反復、自分を叱責し、語りかけ、頷き、ののしり、なぐさめ、言



本間 浩



ほんま ひろし

1930 (昭和5年) 新潟県生まれ
高田中学校生徒の頃、学徒動員
で軍需工場で働く
新潟農林専門学校を経て明治大
学を卒業
青果市場勤務
同流通業務に携わり現在大寿青
果流通コンサルタントを経営
86歳 東京都在住

受賞の言葉

本間 浩

いまでもこの事実——軍国少年が犯したこの罪が許されるか許されないかで自問自答し、苦しんでいます。誰かに打ち明けよう、救いを求めようかと幾度思ったかしれません。老齢に達し遂に思い切つて、惨かつた事実を記述することを思いつきました。言い換えれば遺言書を書いたようなものです。こうして活字になり、後世に残されることで、ホツとしています。一人でも二人でも読んでくだされば、悲劇の再発が防げるようになり、心が休まります。

い訳をして、なぶり続ける。しかし、答は今日にいたるも得られずにいる。記憶があることを呪いさえもする。忘れられれば悩まずにすむものをと。
ただただひたすらに、惨い嵐の過ぎ去るのを耐え忍んでいる。

彼は、私から一個の握り飯を受け取ると、両手に包むようにして持ち……同僚たちと深くうなずきあい……腰につるしていた炊事用の鍋——といってもそれは国際赤十字社からの救い品の缶詰の空き缶で作った代用鍋に……握り飯を崩して入れ……水をいっぱい張り……工場の空き地に生えていた雑草を小さくちぎり……混ぜ……枯草と木の端を集め……器用な手つきでレンズで太陽の光を集めて火を作り……スープもどきの雑炊を炊き上げ……スプーンですくって口に運び……二口か三口をすするのであった。

その後隣の同僚に回し、回して……口元について一粒の米粒を、いたわるように摘んで口に入れる。私はその光景をずっと凝視していた。

握り飯のお礼だといって、救い品のイギリス製の煙草を、一本私に差し出した。初めてのイギリス煙草はウエストミンスターと読めた。私はその煙草を喫う。そしてむせた。「オー、ノー・グッド」偽善を戒めるかのような言葉になった。

以来、同様な展開が数度繰り返されたが、そのつど自己批判をしているうちに、戦争は終わった。
その日を最後に、彼らの姿に再び接することはない。
許してもらえないかとの思いで、尊い命をささげられた彼我の戦士たちに、深く哀悼の意を伝え、惜念の意をもって告白に及んだ次第だ。

ここで付け加えての後述がある。
J市の元捕虜収容所跡地につくられた平和記念公園に、収容中に死亡した捕虜を弔う慰霊碑が建てられている。
ここ数年、新米の穫れるのを待ち、悔悟の念が高じてきて、供養から碑に握り飯を供えに行っている。

その碑の傍らには捕虜虐待の罪を問われて刑死したBC級戦犯者を弔う碑がある。無念の死であった彼らはいずれも農民であったと聞く。生きていれば自分の田で刈り取った米を、存分に食べていただろうにと——その碑にも握り飯を供える。憐憫の情が湧いてくる。
二つの碑に、瞑目し、合掌する。



第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を語りたかったのか」

タイ・カンボジア国境の難民村。作製した砲弾で燃焼になった数多くの死体が散らしていた。

健友館

1700円 (税別/送料共)
御注文はアジア文化社まで



中山茅集子

影書房

かつて、全身に浴びた負け戦の傷も六十五年経った今では褐色のカサブタとなったが、或る日、ふいにカサブタが割がれ落ちて血をみる。つかの間の老いの華やきに迷いこむイクサの証しを、これまでも、これからも抱きかかえて書くしかないと思い決めている。
——「あとがき」より

定価2,000円+税

1600円 (税別/送料共)
御注文はアジア文化社まで

母の手帳

伊藤秋子

久しぶりに会った叔父が私の顔をまじまじと見て、「お母さんにそっくりになったねえ」と感に堪えない口振りで言った。その時私は三十代の半ばで、母が死んだ年に手が届こうとしていた。

母が結核で他界したのは昭和十九年の大晦日、私は五歳だった。当時横須賀で父と暮らしており、母は近くの実家で療養していたので、私は父に連れられてときどき会いにいった。

海岸通りからだらだら坂を上がると、高い石垣の上にある家は建っていた。病室は二階の広々とした部屋で、明るい光が射し込み、出窓から松の枝越しに海が見えた。廊下から見下ろすと、遙か下に屋根が並んでいて、まるで空に浮かぶ船に乗っているようだった。

ある時母は気分がよくなったのか、ピンク混じりの白い糸で編み物をしていった。けれどもそれは仕上がることにはな

けれども以後はいくら促されても、絶対に近づこうとはしなかった。

つぎに私は台所にいた。そこへ近所のミチコちゃんが勝手口から入ってきた。ミチコちゃんはいつものように、遊びましょと言わず、入り口のところで回覧板を差し出すとすぐに帰ってしまった。その時、私の母はいなくなった、自分がミチコちゃんとは違う子供になったのだとはっきりと悟った。

幾日か後、祖母は勝手口の外で火を焚いて、大きな釜に湯を湧かした。湯がふつふつと煮え立つと、そこに母の着ていたものがつぎつぎと放り込まれた。しばらくして長い棒の先に引っかけられて上がってくる着物はどれも黒々としていた。

まもなく誕生日がきて、私は満六歳になった。昭和二十一年、戦争は終局を迎えようとしていた。

それから五十年後の一九九五年に父が亡くなり、遺品の中から「秋子へ」と書かれたノートが出てきた。母の死後程なく来た召集令状に添えて出征する直前に、遺書の代わりにしたためたものだった。浮き出た茶色の染みや今にも切れそうな綴じ糸は長い歳月を物語っていた。冒頭に「秋子が大人になった時、お母さんのことを尋ねられてもお父さんの記憶が薄くなつて話すことが出来なくなると申し訳

かった。小さな前身頃と毛糸の玉がいくつつか、ずっと後までタンスの奥に仕舞ってあった。

前後は闇の中なのだが、私は夜遅く病室に連れていかれた。母は背中にものを交って半身を起こすようにしていた。その回りだけがぼーっと明るく、陰になったところには何人か人がいる気配で、幼い私も只ならぬ空気を感じた。母は口に酸素マスクをあてがわれ、目を瞑ったままで何も言わなかった。父がつと立って、母の後ろに回った。そこには二本の黒っぽい、大きな筒が立っていた。酸素ボンベだった。酸素がなくなつて別のボンベに切り替えようとしたが、なかなかうまくいかない。父は泣いていた。子供心に私はもどかしさを覚えた。

朝になると、母は階下の座敷で静かに寝ていた。もう昨夜のように嵩高くはなかった。祖母が顔を覆っている白い布を取った。そこに何を見たのだろう。何も憶えていない。

ないから思ひ出すままに書いておくことにした」とある。

父は戦争から無事戻ったが、最後まで何も語らなかつたし、故あって母の実家の人たちとも縁が切れたので、冒頭に述べた、切れ切れの記憶と数枚の写真でしか私は母を知らなかつた。

ノートのほかに手帳が三冊あった。それは母が遺したもので、私が生まれてから一歳になるまでの丹念な育児記録だった。中にぼろぼろの紙切れが挟んであって、母の一生が箇条書きに記されていた。字は乱れ、歪み、命が尽きるのを悟った母が娘に伝えるべく力を振り絞って書き付けた、そんなことを思わせる紙切れだった。

それによれば、母は明治四十二年に横須賀で生まれ、二十歳で父と婚約した。ところが直後に結核に罹っていることが判明する。栄養をとって安静にしているより手立てはなく、不治の病と言われた時代である。ショックはどんなに大きかったろう。手帳にはかなり深刻な状態だったとある。だが幸いなことに何とか普通の生活を送ることができ、るまでに回復し、二十五歳でようやく結婚した。とは言え子供を持つことには懸念があった。三十歳になったとき母はどうとう子供を産む決心をする。父の手記には「死ぬ気で産んだ」と書かれている。

無事に産まれたとき、母は「赤い可愛い顔を小さな枕と小さな蒲団の間からのぞかせてすやすやと眠つて居る。今

更自分に産まれたのが不思議に思はれる。母になつた喜びは何に例へ様もなく大きい」と記している。出産した女性が洩らすごく普通の感慨のように聞こえるが、これまでの経緯を思えば、その心情は遙かに深いものがあつただろう。父については「知らせを聞いて飛んでこられた。ホツペタをつついてみたり、のぞき込んだり、ぢつとして居られない様子。俺に似ているとか居ないとか、いろいろ話が出てをかしい」とある。

医者から、体に障るので母乳を与えないようにと言われた。当時は育児用のミルクなどなかったので牛乳を薄めて飲ませたが、しばしば消化不良を起こした。とうとうお乳の出る人を探して貰い乳をすることにした。

そんなこともあつて百日目のお食い初めがすむと、早々に離乳食を始める。

九ヶ月目に入った、ある日の記録である。

八時……リンゴ五十g、魚のすり身二匙

十時……おかゆ二杯、お麩煮

十二時……卵黄一個、スープ五十グラム

二時……じゃが芋、人参少々

四時……ビスケット二個、ウエファー一枚

六時……おかゆ二杯、お豆腐、お麩煮

その頃を思い出して父は、「お母さんがお匙でご飯を食べさせているのを見ながらお酒を飲むのは、此の世の極楽

父のノートによれば、昭和十九年の暮れに母の容態が急変した。

「お母さんは呼吸が出来なくなり、酸素吸入をしなければなりませんでした。けれどもお母さんは秋子のために死んではいけないと思ふたのでせう。死ぬ気は少しもなかつた様です。いよいよとなつた夜、お母さんに秋子を見せようかと云つたら、朝に又見るからと云ひました。お父さんは何も云はず涙が出ました。息を引き取る時秋子はお母ちゃんと大きな声で云ひました。お母さんは秋子の方をやつと見た様でしたが、そのまま佛になつてしまひました」

病気で引き離されるまで、母は私を毎日何度も何度も抱いてくれたにちがいない。それなのに私は母のぬくもりを憶えていない。手帳を読んで、母が文字通り命を掛けて私を産み、あらん限りの愛情を注いで育ててくれたことを知った。私がいなかったら、もっと長く生きることができたかもしれない。けれども母は、子供がいなければどんなに長く生きてても人生を全うしたことにはならない、そう思つて私を産み、育てたのだろう。

やり直しのきかない年になつてから手帳を読んで、その思いを知ったとき、私は密かに自分を責めた。母の分まで一杯生きてきたらどうか。

今年、私は喜寿を迎えた。多少の物忘れはあるものの、

の様に思ひました」と記している。

努力の甲斐あつて、健康に満一歳の誕生を迎えた。けれどもその秋、私はひどい消化不良を起こし、母は夜もろくに寝ないで看病を続けた。その無理が祟つて母は咯血をし、以後は寝たり起きたりの病人になつてしまった。

父は書く。「お父さんは秋子が傍に行くこと叱りました。病気が移ると心配だからです。お母さんも辛かつたでせう。秋子も辛かつたでせう。お父さんも辛かつた」

手元に三歳の記念写真がある。祖母に負われ、シヨールで口元まで隠して険しい目つきでこちらを凝視している。どこかで見たと思つたら、外国の難民キャンプでカメラがとらえた子供の目だった。その目はレンズを通り越して、自分の命を脅かすものを見つめている。

私はカメラを異常に怖がつたそうだ。それで顔をすっぱり隠しているのだが、私を怯えさせたものは本当のところカメラではなく、もつと心の奥深いところにあつたのではないだろうか。

昭和十八年、母は実家に戻つて寝たり起きたりの生活を送っていた。次第に戦争は激しくなり、B29がたびたび飛来した。警報が鳴るたびに防空壕に入らねばならず、病人の体は弱るばかりだった。その上食料も不足して、栄養のあるものを摂るどころか、日々の飢えを満たすのが精一杯の有様だった。

ほけもせず、健やかな毎日だ。母はきつと、それでいいのよと言ってくれる、今はそんなふうにいる。

受賞の言葉

伊藤秋子

この作品は、亡き父母と私の合作と言えるかもしれせん。

見つかつてから二十年、手帳はますます古びてしまいました。人生の仕舞い方を考える年になつて、これらの遺品をどうしたものかとふと考えたりします。

それがこのような賞をいただき、その一部でも活字として残ることになりました。もしあの世というものがあるのなら、父も母もきつと喜んでいてくれることでしょう。

選考委員の皆様には感謝いたします。



伊藤秋子

いとう あきこ

1939 (昭和14年) 生まれ

お茶の水女子大卒

主婦業の傍ら、翻訳に従事

第9回エッセイ賞奨励賞

「相模文芸」同人



黒ダイヤの島

宮本 肇

Essay

九州の西端、長崎半島の細長く突き出た丘の上から東シナ海を望むならば、夕陽が今日の日に終りを告げ、その神々しい姿を海中に没し去ろうとするそのとき、はるか洋上に黒々と浮き出ることの島の素顔をあなたは見る事ができる。陽光が眩しすぎる昼間見るならば、幾多の採鉱設備と事務所、炭住などのコンクリート建造物が、岬々とそびえ立ち、船先を真っ直ぐにこちらへ向け、突き進んでくる不吉な軍船を想わせる。陽が沈むと、幾万ともしれぬ闇がそれらすべてを覆い隠す。その闇の深さ、怨霊の宿つたような不気味さ、もの妻さは確かに死の船だ。じっと見ていれば、ぐんぐん近づいてきて、いつのまにか暗黒の島に飲み込まれてしまいそうな感じを受け、身震いするだろう。

付近の人々が、この島のことを決まった名前前で呼ばず、軍艦島、または地獄島と呼ぶのは、勇ましい船と言う意味

私はいつとも五時のサイレンが鳴ると同時に風呂場に駆けつけた。

私が粗末なガラスの引き戸を開けると、まだ誰も入っていないかった。分厚い木の風呂の中は底まで透き通っている。しめた、私は急いでまっさらの風呂のなかに飛び込んだ。まもなく坑内から上がってきた裸の男たち十二、三人が、どつとなだれ込んできた。彼らは頭のとっぺんから足のつま先まで、べったりと炭塵をくっつけており、ろくに洗い流しませず、湯船の中に飛び込んでくる。地底の苦役からの解放感なのか、彼らは大声で喋り散らし、水をぶっ掛け合ったりし、子供のようになぐりあつた。下半身はパンツの跡だけがくっきりと残っており、真ん中にぶら下がっているどす黒い肉塊を、ブラブラさせながら右往左往している。荒くれ者に似合わず、まるで幼児のようになっている。そのころメガネをかけた炭坑夫などほとんど見あたらないうちに、一人のメガネをかけた坑夫がいた。彼のことをみんなはインテリと呼んでいた。

そのころ、日中戦争は治まるどころかますます拡大していった。彼は以前、東京の大学を優秀な成績で卒業したのだが、その頃はやっていったマルキシズムにはまり込み、反戦、反体制活動に走り回っていた。ある日アジトに寝ている時、突然憲兵に踏み込まれ、逮捕されてしまった。拷問の末、九州の離れ島のこの炭坑に送られてきたのだった。

ではなく、島そのものの得体の知れぬ恐怖感と、島に住む人々への恐れからそう呼ぶのだ。この島に足を踏み入れずぐに目につくのは、あちこちの切り通しや、露出している岩肌、黒く輝いている無煙炭の層が顔を見せていることだ。いわばここは黒ダイヤの島だった。

私が小学五年生のとき、父がこの炭坑の庶務主任として入社したので、私はこの島の小学校に転校してきた。私たちの社宅には風呂がなかったため、みんなは炭坑の共同風呂に入らせてもらった。選炭場の近く、ボタ山のすぐ先にバラック建ての共同浴場があった。夕方、五時のサイレンがひときわ高く鳴り響くと、一番方が終わり坑内から上がってきた採炭夫たちは、風呂場へと急ぐ。一番風呂でない、そのあと、湯船の中は墨を流したように真っ黒く染まってしまい、石炭の粉末でザラザラになるのだ。だから

黒船島の中心部の坂道を、百メートルほど上がった所に太い丸太の柱が立っており、黒島炭坑と野太い字で書かれている。左側は坂道に沿って、撰炭機用の栈橋が長々と海に向かって延びている。ここ黒島炭坑は斜抗になっていて、途中で幾つにも枝分かれしながら、地中深く掘り進み、先端は海底から二百メートル以上も下になっている。坑内は換気が悪いので、湿度九十パーセント、温度は三十度以上もあり、蒸し風呂のようなのだ。朝入坑するとき、みんなは「今日も一日、なんとか頑張ろう」と思う。しかし二、三キロもの長い斜抗を歩いて地底の現場につくと、それだけで体はだるくなり働く意欲が萎えてしまう。

坑口から覗くと、トロツコの細いレールだけが、二匹の白蛇のように、妖しい光を放ちながら地底に向かって延びている。ときおり地の底で交代した坑夫たち三、四人ずつが、ツルハシやスコップを肩にかつき、いかにも疲れた足取りでゆっくりゆっくり斜抗を昇ってくる。男は黒へこ（ふんどし）一つ、女坑夫は、乳当てと短い腰布を巻いただけの、裸に近い出で立ちだ。顔も体も石炭の粉がビッシリとくっつき、汗と混じり合い、まだら模様を作っている。黒人のような顔の中で、目だけがギラギラと不気味に光っていた。

この炭坑の、独り者が入る日給社宅は、七十畳敷きほ

どの細長い大部屋に、五十人ほどの坑夫が詰め込まれていた。部屋の中には押入れも荷物置き場もなく、窓際に手回し品を載せる棚があるだけ。布団は壁際を頭にして敷き、中央で足と足を向け合い、真ん中が通路になっている。朝起きると布団は足のほうから二つ折りにし、重ねておく。

各飯場には、親方と呼ばれる納屋頭がいて、給料、食事費、部屋代、日用品など、生活の全てを取り仕切っており、勤怠の監督も併せてやっていた。だがこんな西九州の離島の炭坑には、坑夫はなかなか集まってこない。坑夫を募集するには、便利な納屋制度を利用し、親方の力で集めてもらう。その他専属の募集人を抱え、遊び人、前科者、ルンペンなどまでも狩り集めてきた。そのうち増炭の要求が強まると、遠くは神戸、大阪にまで網を張り集めて回った。

募集人には、契約人数により募集手当が支払われる。だから、募集人は地獄島、タコ部屋と恐れられている。炭坑生活の内幕など、おくびにも出さず「給料は一般の会社の二倍は出すから……」などと甘い言葉で釣り、期間三年の契約書に印判を押させた。九州本土から船に乗ってこの島に渡ったが最後、三年間は厳しい労務役人の目から逃れられない仕組みになっていた。

彼らは炭坑に連れてこられたとき、現金を持っていることはほとんどない。着の身着のまま、風呂敷包み一つぶら下げてきて「ここで稼いで儲けさせてもらおうよ」といった。誰と誰は岸壁周りを、誰々は船着場に……と、要所要所に見張りや追跡を命じられる。時には海を隔てた長崎、島原、天草の港にまで張り込みに出かける。

役人たちは二人一組となり、それぞれが木刀と懐中電灯、それに二、三日分の食料を携行する。建物の中、廃材の茂みを掻き分け、岩をも起こすような搜索が続けられる。欠わった者は、捕まったら最後、半殺しの仕置きが待っているのだ、必死になって逃げる。追う方の役人たちも、捕まえると報奨金が出るので、血眼になって探し回る。だからよほど綿密に準備し、うまく逃走しない限り、欠わり者の八割は、二、三日の内に捕つてしまう。長くても一週間だ。搜索は、二週間で打ち切りになるので、そのあいだ捕まらなければ占めたもの。ある者は山の中に、二週間隠れ通したし、小船を操って島原に渡り、百姓になりすまして成功した者もいるという。鉱山としては、搜索には多勢の労力と費用がかかるので、欠わり防止のため、見せしめに仕置きを行う。

そのころ戦雲ますます急を告げ、軍部からは増炭の要求が、日増しに厳しくなってきた。この炭坑でも、いちばん目立つ選炭機の横に、「掘れよ、起こせよ、産業戦士」と書かれた大きな幟が吊り下げられ、「増産、増産！」の掛け声は、炭坑だけではなく島中にも溢れていた。

ある日私は、島の中心の小高い山に散歩に出かけた。帰

手合いが多い。だから部屋代、食費、酒、タバコに至るまで納屋頭からの前借りである。納屋頭は、前借り金に利息を付けて給料から天引きする。だから一度前借りすると、次の月も次の月もで、借金は増えるばかり。毎月いくら働いても金は残らず、「飲んで食ってチョン」の生活となる。夫婦者は仕事から帰ると、妻や子供の待つ二間の社宅に帰り、お互いに慰めあい、地の底での苦役の疲れを癒すことができる。しかし飯場に住む独り者は、仕事から帰っても、夕食後は酒を飲んだり、博打をしたりして時間をやり過ごすほかなかった。

夏の夜、大部屋の前を通ると、開け放たれた窓から上半身裸になり、唐草模様や竜の刺青を見せびらかしながら、車座になって花札をやったり、酒を飲んでドンチャン騒ぎをしているのが覗けた。だから博打や酒の上での喧嘩や傷害事件など、珍しくはなかった。

炭坑から逃亡することを「欠わり」と呼ぶ。どこの炭坑でもあるのだが、ヤマ（炭坑）の生活に見切りをつけた坑夫たちは逃亡を企てる。九州本土から船で僅かのこの黒島炭坑でも、逃亡者が後を絶たなかった。ある一日、「欠わったぞー」の声がヤマの事務所にとび響くと、ヤマだけではなく島全体が非常警戒態勢に入る。三十人ほどいる労務役人たちは、夜の夜中、益暮れを問わず、緊急集合をかけられ、すぐさま搜索会議が開かれて追っ手が出動す

りに下り坂の途中、左の崖下の方から騒がしい声が聞こえてきた。何だろう、私は立ち止まり崖の下を覗いてみた。そこは炭坑の事務所前になっていて、一人の男が裸で立たされており、その周りを十人ほどの労務役人が取り囲んでいた。

「おまえ、悪いのは分かっているのか。欠わったらどんな目に遭うか知ってんだろうな」

「この野郎！ てこずらせやがって、太てえ奴だ……」

まず親分と呼ばれる労務主任の太い木刀が一閃した。「ばしっ」と鈍い音がし男の背中に喰い込んだ。それから堰を切ったように、まわりを囲んでいた労務役人たちの木刀がひらめき、男の背中を打った。

「いてえ！」 「痛っ、痛っ」 「いた、た・た・た……」

しばらくは悲鳴が続いた。が、そのあとは「うっ、う、うっ……」と呻き声に変わった。まもなく男の声は聞こえなくなった。男の体が崩れ落ちていった。気絶したらしい。

「おい、水に漬ける！」親分が怒鳴った。自分の労務役人が二人で倒れた男を引き摺り、そばを流れている狭い排水路の中に押し込んだ。そこは坑内からの湧き水が流れていてかなり冷たい。男は僅かのあいだで、意識をとり戻した。自分たちは男を溝から引き摺り出すと、再び役人たちの木刀が閃き、男の体を打ち据えた。男は再びドサツ、と

軍艦島は近年世界歴史遺産として登録され、一度に日本中に知られることになった。が、戦時下、石油に代わるエネルギーとして石炭が重用され、増炭増炭で働かされた多くの炭坑労働者の実状は知られていない。私は子供の頃、軍艦島の近くの島に住み、父は炭坑に勤めていたので、地底での採炭坑夫たちの、タコ部屋生活や、過酷な仕事の実態などを知ることができた。これは今私が書かねば永久に埋もれてしまうと思い、敢えてエッセイにまとめた。

受賞の言葉

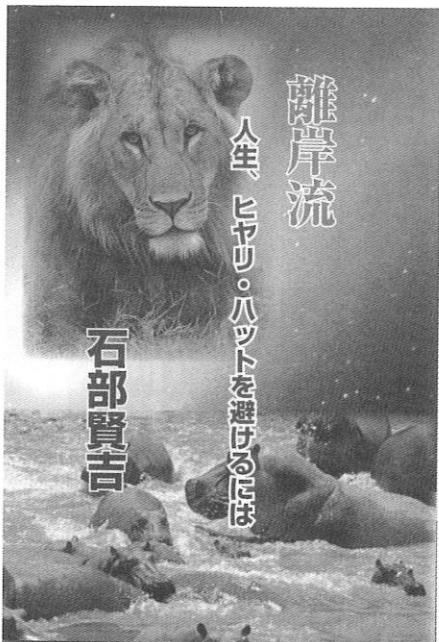
宮本 肇



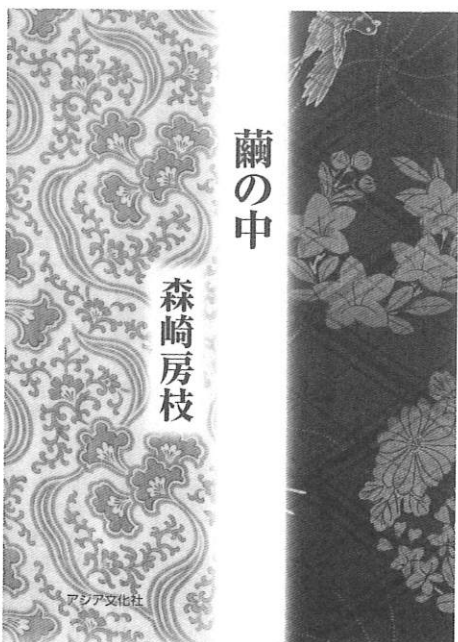
宮本 肇

みやもと はじめ

1929 熊本県上天草市生まれ
 私立三井工業学校卒業
 電機店経営
 第7回ノースアジア大学文学
 賞優秀賞を受賞
 2015「文芸思潮」エッセイ賞佳
 作受賞
 現在「相模文芸クラブ」同人



元一流商社マンの地球規模の体験記
 1300円(税込/送料共)
 御注文はアジア文化社まで



まほろば賞特別賞・銀筆文学賞優秀賞受賞作品
 森崎房枝小説作品集
 1500円(税込/送料共) 御注文はアジア文化社まで

倒れ込んだ。
 「おい、もう止める。これ以上やると死んでしまうぞ」親分のひと声で男の仕置きはやっと終わった。後日、炭坑からは搜索費用として多額の弁済金を押しつけられるのだ。ある日「ヤマがバレたぞー」という叫び声が炭坑から村中に伝わってきた。坑口の近く、事務所の前にはすでに労働係りや庶務の役人、非番の坑夫たち、納屋頭などが群がって騒いでいた。「どこだつ、どこだ……」「何番坑だつ」と突き刺すような声が飛び交う。
 坑内がバレる(落盤する)ことは黒島炭坑ではもつとも恐れられている災害だった。地盤の悪い所、支柱工事の弱い所では落盤が時たま起きた。これまでも何回か落盤があり、そのたびに何人かの犠牲者が出た。そしてこればかりはいつ起きるか、予測がつかないので、みんなはイヤイヤしながら見守っていた。三十分以上もたつたころ、坑内から注進が上がってきた。崩壊現場には八人ほどいたのだが、あのインテリだけが逃げ遅れ、岩盤の下敷きになったという。一陣目の救助隊は既に入っていた。続く二陣目が慌しく入っていった。それからまたひとしきり時間がたった。急に巻き上げ機が動き出し、「ゴロゴロゴロ」という音が闇の彼方から響いてきた。その音が少しずつ大きくなっていき、そのうち二台の炭車が姿を現してきた。

みんなの間から「オーツ」という嘆声が漏れた。怪我人は後ろの炭車に載せられていた。頭から足まですっぽりと毛布に包まれており、よくは見えない。仲間たちが炭車の両脇に付き添い、みんなの前に姿を現してきた。「まだ死んでない……」という声があった。みんなの祈るような目が糞虫のようにくるまれたインテリに注がれた。インテリは炭車から担ぎ下ろされると、用意されたリヤカーに載せ替えられた。よくみると、毛布の端から、靴が脱げて炭塵で真っ黒になった、インテリの片足が覗いていた。リヤカーは、門の前の坂道をゆっくりと下ってゆくと、病院の方へと消えていった。
 「かわいそうに、どうしてインテリだけが逃げ遅れたんだろう……」みんなはヒソヒソと話し合っていた。彼が入院した病院の一室には、誰も身寄りの者は来ていなかったが、枕元の花瓶には、誰が持ってきたのか野の花が活けられていた。彼の両親は成績の良かった彼に期待し、せっかく東京の大学にまでやってくれたのだ。やっと卒業し、良い会社に入社してくれると期待していたら……。翌日、医者と看護婦、労働役人たちの見守るなか、臨終のときがやってきた。
 「こんな所で、こんな死に方をするとは思わなかった……」
 これがインテリの最期の言葉だった。

熱き再会

高橋惟文

Essay

四年前の夏、私は東京・文京区に所在する山形県出身者学生寮の地元OB会に出席した。

参加者はその会で学生時代の思い出話に花を咲かせるのである。私は四十を過ぎた頃から仕事や私事で都合がつかないことが多く、この三十年ほど欠席が続いていた。「たまには出て来い」と電話をくれた友人がいて、私は「来年は必ず出席する」と答えていた。それは、私の三年後輩のH君の動静を知りたかつたからである。

H君には大学を卒業後、一度も会っていない。連絡をとる手段がないわけでもなく、その気になれば消息はつかめただろうが、私にはそこまで踏み込む気概はなかった。後年、彼は帰郷して起業したという噂は聞いていた。

OB会の受付で渡された参加者名簿にH君の名前は載っていたが、彼はなかなか姿を見せない。開会セレモニーが終わりがけた時、彼は会場に駆け込んで来た。そして、たまたま空いていた私の隣席に座った。実に四十五年ぶりの

再会である。

H君と初めて顔を合わせたのは一九六七年四月で、東京オリンピックの三年後である。都内は大イベントが終った後の虚脱感につつまれていたが、革新都知事が誕生するなど、私が暮らす学生寮内には浮き浮きしたムードが漂っていた。

そんなある日、新入生のH君が私の部屋を訪ねて来た。彼は私と同じN大法学部である。

H君は将来、法律家をめざしたいと言った。私も同じ夢を抱いていたので自らの反省を込めてこう話した。

「司法試験の勉強に取りかかる前に、まず自分自身の人間性を高めなければならぬ。そのためには文学や歴史、芸術などの本をたくさん読むことが大事だ。そうすれば心豊かな法律家になれる」と。いま振り返るとまさに赤面の至りである。というのは、それと真逆の学習法に私はどっぶ

り浸っていたからだ。まじめなH君は時折手帳にメモしながら私の話を聴いている。私は調子に乗って言葉を続けた。「いきなりそんなことを言われても雲をつかむような話だよね。一人で学ぼうとしてもなかなかうまくいかないものだ。人生を真剣に論じ合うようなサークルに入ることも一つの方法だろう」

「サークルですか、たとえばどんな……」

「いろいろあるけど、やっぱり『社研』かな」
「社研」とは、「社会科学研究会」の略称である。学内では最左派のサークルで、就職するうえで不利と噂されていた。当時の私は、左翼こそが善であると信じて疑わなかったが、情けないことに左翼系の団体に加入する勇氣はなかった。H君に「社研」を勧めたのは私の身代わりにと、無意識のうちにそのような気持ちがあったのかもしれない。

H君は、「分かりました。『社研』ですね」と念を押して部屋を出て行った。それから数日後、彼は「社研」に入会したことを私に告げに来た。

その後、私は教育実習や卒論、就職活動に忙殺され、H君とゆつくり話す機会はなくなった。たまに廊下や食堂で顔を合わせることはあっても、「社研」を話題にすることはなかった。

私は大学を卒業後、帰郷して教職に就いたが、H君の動

静はずっと気がかりであった。「社研」に入ることを勧めたことに責任を感じていたからである。学内最左派と目される「社研」のメンバーということで何か不利益を被っていないか、処分を受けたりしていないかと、いつも頭の片隅でH君の顔が点滅していた。

就職して四ヶ月が過ぎた頃、学生寮の寮母と電話で話す機会があった。その時、H君は法学部三号館に籠城していると知らされたのである。N大では私が卒業した直後に多額の使途不明金の問題化し、それに対する学生の抗議行動が連日マスコミで報じられていた。そして、学生の自治活動を制限する大学当局への怒りも相俟って全学共闘会議、略称「全共闘」が結成されたのである。やがてほとんどの学部は「全共闘」によってバリケード封鎖されるが、その先頭に立っていたのは「社研」のメンバーである。JR水道橋駅の周辺や白山通りでは、N大生のデモ隊と機動隊が連日衝突した。また「全共闘」の校舎占拠と、機動隊によるバリケード撤去はいちごこの様相を呈していた。

私は隣席のH君とビールを飲みながらN大闘争について熱い思いを語り続けた。二人の会話は、周囲の目に「ひそひそ話」と映ったようで誰も近づかない。

「『社研』ではずいぶん勉強になりました」

「そう言ってもらえると私も救われるよ。ところで、大学

は卒業は出来たの？」

「それが出来たんですよ。その年はほとんど授業はなかったんですが、年末から急に『疎開授業』が始まりました」「それは新聞で読んだ。群馬県や埼玉県内の旅館を借り切って大広間で授業したらいいね。でも、きみはずっとバリエードの中だったんだらう？」

「はい、でも大きい声じゃ言えませんが、授業にはちょっとだけ出ました」

「大人数の移動授業となると、大学側も学生の出欠を正確に把握するのは無理だらうね」

「そうなんです。大学としては単位を認定できる程度の授業はやったと、いわゆるアリバイづくりだったんでしょ。年度末試験はほとんどレポートでした。私もどさくさに紛れて少しは単位を取りました。三年と四年で挽回して、どうにか卒業にこぎつけたんです」

日君は残り二年間で三年分の必要単位を取得したという学年ごとの進級制をとる大学ならそれは絶対に不可能なことである。私は恐る恐る聞いた。

「全共闘のメンバーの何人かは裁判で実刑判決を受けたようだけど、きみは？」

「ムシヨですか？ 私は入ってません」

「それはよかった。身柄を拘束されたと聞いていたから心配していたんだ」

工事用の番線で隣の机の脚にきつく繋がれている。これなら「スト破り」は絶対できないだろうと感心した。

玄関の左端に、「ご用の方は紐を引っ張ってください」と赤色のペンキで書かれた紙が貼ってある。上から垂れ下がった丹前の帯紐らしきものを二、三度引っ張ると、二階の窓からヘルメットをかぶった男性が顔を出して「何かご用ですか？」と聞いてきた。

日君に会いたいと言うと、玄関の左端に立てかけてあるハシゴで昇って来いと言う。

臆病な私は機動隊の方へ一度振り向いた後、見るからに不安定な作りのハシゴに足をかけた。

日君は長い籠城生活のため、体は痩せていたが眼は輝きを失っていないかった。私は土産の菓子を手渡して、「元氣そうで安心した、でも決して無理をしないで、三度の食事はきちんと取って」などと話した。

それは私にとって終生忘れ得ぬひとときであった。しかし、日くんはその日のことを全く憶えていなかった。彼にしてみれば、機動隊のみならず「スト破り」の屈強な連中と日々命がけて対峙していたのだから、私が訪れたことは記憶に残らないほど些細なことだったのだから。でも、籠城生活はいろいろと変化に富んでいたようだ。近くで起こった交通事故の負傷者を救助したり、窃盗犯を捕まえるなどして警察から感謝状を貰ったともいう。その感謝状は、

「保護者会や文化人が『N大闘争救援会』を結成してくれて、いろいろ助けてもらいました。警察の留置場には三、四回入りましたが、私は大物じゃありませんから三日もすれば釈放されました。その都度、仲間はあちこちの警察署に分けられるんですが、学生運動のほかにも留置される者はいますから、部屋が満員になると出されちゃうんです」

「でも、出してもらうには手続きが面倒なんだから？」

「そのとおりです。最初は学生寮の舎監の先生が身元引受人になってくれましたが、二回目からは山形の実家に警察から直接連絡がいくんです」

「ということは、両親がわざわざ上京して？ 心配しただらうね」

「はい。でも、親父は『自分で間違っていないと思うなら許す』と言ってくれました。おふくろにはだいたい泣かれましたけどね」

「ところで、私がバリエードの中に会いに行ったこと、憶えてるよね。それ、確か一月だった」

「えっ、そんなこと、ありましたか？」

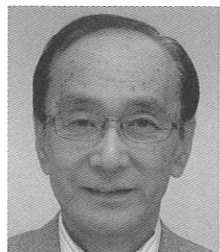
彼がバリエードの中で年を越したことを知った私は、年が明けるといたたまれずに上京したのだった。JR水道橋駅で下車すると、何人かの機動隊員が法学部三号館を遠巻きに見ている。校舎の入り口には長机が何段にも積み上げられて人の出入りは出来ない。念入りなことに、机の脚は

果たして「全共闘」に宛てたものだったかは聞き漏らした。いま、日君は不動産事業を営みながら、時折企業等の研修会に講師や助言者として招かれるという。彼のゆるぎない自信に満ちた表情は、長い間背負い続けてきた私の重い荷物を軽くしてくれたのだった。

受賞の言葉

高橋惟文

二年前の秋に胃ガンと直腸ガンの手術を受けました。その際、医師から「術後五年の生存率は七五％」と告げられました。その数字はかなり高いらしいのですが、不安は残りました。でも、このたび優秀賞をいただいて体調はとても良くなりました。生存率は一氣に二〇％ほど上がったような気がします。選考委員の先生方には深く感謝申し上げます。誠にありがとうございます。



高橋惟文

たかはし くれぶみ

山形市在住

1945 満州・新京で生まれる

68 日本大学法学部卒業

2005 高校教員を定年退職

08「晩霜の朝」で第55回
地上文学賞

11「茜色の軌跡」で第7回
銀華文学賞受賞

母との約束

大倉 六

平成二十四年十月八日、嬉しいニュースが飛び込んで来た。それは京都大学iPSの細胞研究所長、山中伸弥教授がノーベル生理学・医学賞を受賞したからである。日本中が歓喜に沸く中、私にも希望の光が見えてきた。iPS細胞とは人工多能性幹細胞のことで、人工的に遺伝子を操作して作製された細胞である。このiPS細胞は、ほとんどの組織や臓器に変化できる可能性を持っている。そのため、移植を必要とする患者への再生医療や難病疾病のメカニズム解明および新薬開発に期待がかかる。

ノーベル賞受賞ニュースの翌日、父が私の元にやって来て

「ニュース、見たか？ 山中先生、凄いな！」

「これで病気も治るぞ」

少し興奮気味に言った。それもそのはずで、父も私もこの日をどれだけ待ち望んでいたことか……

初めて聞く病名に戸惑いながらも、病気の説明を聞くうちに恐怖と絶望に襲われた。運動ニューロン病は筋肉を動かす神経が変性・死滅する病気で、全身の筋肉が徐々に委縮し、運動機能が失われる。一般的に二～五年で全身の運動機能が奪われ、呼吸も出来なくなる。現医療では原因も治療法もなく、代表的なものにALS（筋萎縮性側索硬化症）があり、私もこれに該当する。ALS患者の苦しみは、体が動かなくともあるが、早い段階で人工呼吸器装着による延命治療の選択を決めなければならない。この時、私は三十一歳。結婚三年目で一歳になる息子がいた。まさに青天の霹靂で、途方に暮れながら退院した。

私は近い将来に不安を感じながらも、普通の生活を送ることに努めた。それが妻の望みだったし、家族の幸せだった。普通に会社へ行き、休みの日には家族で買い物に行く。いつまで続くか分からない普通の生活に幸せを感じつつ、私は延命治療をするかどうかを決めかねていた。延命治療を選択した場合、のど仏の下に気管切開をし、人工呼吸器を装着する。気管切開をすると、昼夜問わずの吸引をしなければならぬ。吸引は基本的に家族が行うため、家族の介護負担が想像以上に重くのしかかる。延命治療を拒む患者の大半が、家族に迷惑をかけたくないという理由である。

退院して数ヶ月が経った頃、私は両親が住む横浜の実家

平成十三年夏、私は足に何とも言えない違和感を感じ、どうも歩くのがぎこちなかった。初めは運動不足かと思っていたが、しばらくすると周りの人から

「足、悪いの？」

と言われるようになった。私は直ぐに近所の病院に行き、頭部・頸部のCT検査をもらったが、異常は見られず、原因も分からなかった。そこで紹介状を書いてもらい、専門の神経病院で診てもらうことになった。紹介された病院に行くこと

「すぐに検査入院が必要です」

と言われ、私は不安と共に入院した。入院期間は二週間で、尿検査、髄液検査、血液検査（静・動脈）、胸部レントゲン、頭部・頸部と胸部のMRI、心電図、筋電図、肺活量、そして耳鼻咽喉科の検査をした。全ての検査が終わる、担当医師から病名が告げられた。

「運動ニューロン病です」

に一人で行く機会があった。実家に着くと、玄関、廊下、トイレ等に手すりを取り付いており、和室の部屋にもソファが置いてあった。久しぶりに両親と食事をし、家族のこと、会社のこと、病気のこと、これからについて話をした。すると、父が

「必ず治療薬が出来るから、諦めるな！」

と言った。そして母が

「生きなさい」

と泣きながら言った。私も子を持つ親として、両親の気持ち pensando、何とも言えない気分になった。親にとつて、一番の悲しみは子を失うことである。一日でも長く生きる事が、私に出来る親孝行かも知れない。

かつての私は、自分が病気になることや障害者になることを想像もしなかった。また、「病気で苦しんでいる方」や「障害で不自由な生活を送っている方」について考えることもなかった。病気になる、障害者になってみて、初めて気付かされたことがある。それは、健康のありがたみと自分の無力さである。

誰でも生きていれば、病気になることもあれば、怪我をすることもある。過去に「どのような生き方」をしたかどうかにかかわらず、人は平等に「死」が訪れる。誰もが生きていくうちは「ピンピン」と、死ぬ時は「コロッ」と逝きたいと願っているはずだ。しかし、大抵の人は簡単には

第2回 文芸思潮賞 中間発表

- 「未練」 兩宮夢彦
- 「ビート」 芳賀哲也
- 「錆」 河野つとむ
- 「日々の楽しみ」 大島武弘
- 「罪業の果て」 山中三津子
- 「橘袖の夕べ」 吉田宏子
- 「許す」 下村きよ子
- 「ブルーローズ」 九条之子
- 「絶唱 潮騒の子守唄」 大森耀平
- 「街路樹」 高橋惟文
- 「気配」 大島武弘
- 「Bye bye World (バイバイ・ワールド)」 西田信博
- 「尖閣からの飛び火」 ゴルビー長田
- 「ユキノ」(信を通わせながら生きた人々) 森千恵子
- 「炎の舞い」 古羽田良
- 「トラベラーズ」 飯島眞久
- 「転生」 紙屋里子
- 「流水が哭く町」 野原憲次
- 「辿り着いた ところ」 能勢里子
- 「海洋の響き」 二宮英郷
- 「じはんき きょうそう きょく」 いまだまりこ
- 「ミロとユキ」 佐山雄次
- 「崇の青春」 黒沢良子
- 「青柳の糸」 川西葉吉
- 「男娼」 西村一江
- 「ほくのパートナー」 宵待閑仁
- 「空の裂け目の赤い星」 井上岳人
- 「五彩の壺」 越山正人
- 「闇に笑う」 一之倉諒
- 「クリスマスイブの出来事」 白兼栄光
- 「三年」 きなりかず
- 「昨今江戸事情」 ふじとうさくしゅう
- 「ビオロンのため息の家庭内宗教戦争」 梶原まさき
- 「石橋」 神田聖
- 「憑き」 櫻間遊三
- 「海と赤いテント」 山口謙治
- 「羊に嫌われた狼」 白井花
- 「夕映え 九十五歳を生きる」 飯島もどめ

無印は一次予選通過者、○印は二次予選通過者、◎印は三次予選通過者です。

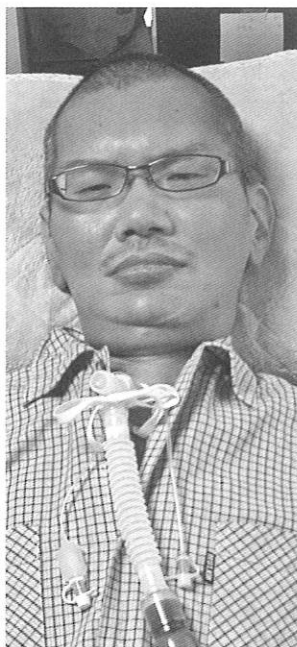
死なせてもらえず、もがき、苦しみながら死を迎えることになる。それはまるで、「赤子」のように人の助けを受けながら生きていく。だからこそ、「健康」であることに感謝し、決して「独りで生きている」と思わないことである。

病名告知を受けてから十四年が経ち、今の私は寝たきりの生活を送っている。食事は胃ろうからの経管栄養で、呼吸は人工呼吸器の力を借りている。自分ではほとんど何も出来ず、人の手を借りながら生きている。この間、悔しい思いもしたし、惨めに思うこともあった。それでも生きることを選んだ。なぜなら、私には家族がいるからである。妻と出会い、子どもという宝物を頂いた。病名告知を受けてから新たな命も誕生し、家族四人で賑やかに暮らしている。家族の存在が「生きる」力と勇気を与えてくれる。両親も我が家の傍に引越してくれ、何かあると直ぐにかけ付けてくれる。また地域の病院、地域の主治医、訪問看護師、訪問介護士など、多くの人たちに支えられて暮らしている。母が言った「生きなさい」、言葉の重さを噛みしめながら、私は今も生きている。

受賞の言葉

大倉 六

この度は、第12回「文芸思潮エッセイ賞」優秀賞を頂きまして、有り難うございます。これまで私を支えてくれた家族、両親、地域のスタッフ、全ての方に感謝です。そして、「生きている」ことに感謝、感謝です。



大倉 六



おおくら ろく

1970 神奈川県横浜市生まれ
31歳の時にALS(筋萎縮性側索硬化症)と診断される病気を機に母から「自分の思いを書きとめなさい」と言われ、執筆を始める
現在、妻と二人の息子と東京都で暮らす

子宮破裂

流川千里

●新聞記事
何げなく新聞をめくっていたら「陣痛促進剤」の文字が目に見え込んで来た。目立たない小さな記事ではあった。

出産で子供が脳性麻痺になった場合に補償し、原因分析や再発防止策の検討も行う産科医療補償制度に基づく「再発防止報告書」にミスがあったのだ。基準を逸脱した陣痛促進剤の過剰投与が実際は6割以上なのに3割前後と過少記載されていたのだ。制度を運営する日本医療評価機構は「担当者の入力ミスでチェックも不十分であり申訳なかった」との弁解。何ともしっくり来ない文面でムカついていた。記事の文面から見て内部告発の匂いもする。担当者のミスと言うのも臭い。既に陣痛促進剤を扱う製薬四社が不実のデータを引用した文章を全国の医療機関に配布したそうである。訂正はされたようだが、医療訴訟で陣痛促進剤が悪者となつてはまずい製薬会社の立場が浮き彫りだ。なぜこの小さな記事にこれほど執着するのかわかると、我々

切開が選ばれた。つまりこの時点では、S医師は初めての子を受けてくれた恩人であり天使であったのだ。

この帝王切開から丁度二年目が今回の子宮破裂につながり、陣痛促進剤の過剰投与があったためと考えられる。諦めかけていた子供を授かり、S医師、病院と我々のウィ

ンウィンの関係も、事故後忽ち崩れ去り先方の態度は硬化し一刻も早く病院から立ち去ってくれと言わんばかりの冷酷さに変貌した。天使が閻魔大王に変身したのだ。何らの詫びもなく補償もなし。謝罪すれば非を自ら認め補償に発展するからである。

●医療訴訟

その後、娘のリハビリの病院が決まった頃、医療過誤の訴訟のため、その道の専門の弁護士を訪ねた。担当となつたH弁護士と相談し、カルテの保全を図る事とした。訴訟を起す際の極めて重要な証拠となる。無事カルテは保全されたが、カルテを見て驚いたのが、詳細に我々の行動も克明に記録してあったことだ。点滴が装着されていた娘の腕から出血が見られたことに対する病院への叱責に対し「父親は興奮気味である」と淡々とカルテには記されていた。私の怒りと病院側の淡々ぶりの対比がカルテにくっきりと映し出されていた。

がまさに陣痛促進剤の被害者家族であるからだ。この記事で二年前の妻の嗚咽と苦い記憶がまた蘇ってしまった。

●妻の子宮破裂

つくづく思う。明日にどういう人生が待ち構えているのかは本当にわからないものだ。朝、出産予定の妻が入院している都心の病院から突然電話があった。訳を聞いたが、すぐ来てくれとしか言わなかった。嫌な予感を持ちながら二才の長男を連れて病院に駆け付けた。妻は子宮破裂を起こしていたが、九死に一生を得た。女兒は低酸素で脳性麻痺となった。前夜の楽しい会話は何だったのだろうか。

実はこの子宮破裂には伏線があったのだ。結婚後まもなく、卵巣腫瘍摘出に伴う流産で子供が産めない体になった妻がこの病院のS医師の手術のおかげで第一子である長男を授かる事が出来た。日本では初めての術法だとS医師も満足そうだった。学会にも成功事例として報告したはずである。勿論確実なる出産の実績を得るためにも慎重に帝王

その後、暫くしてH弁護士から連絡があった。病院からの書状は、病院側の非はなく訴訟をするならどうぞという挑戦的なもので、嫌味にも六人もの弁護士の名前が連ねてあった。

「おう！さすがに大病院だ。顧問守護神を六名も用意したとは」妙な感動があった。H弁護士も態度が豹変し、訴訟しても勝つ可能性が低いことを眩し始めた。もし私に有り余る金と時間があったなら、辣腕弁護士を雇い徹底的に訴訟していたかもしれない。しかしながら娘は幸い生き残り、リハビリ等超多忙な毎日が待っている。長男も2才でまだ手がかかる。私と妻の両親とも高齢、病気で彼らのサポートは到底期待出来ない。私も毎日が会社勤めの身の上である。四面楚歌とはこういうことを言うのだろう。変な話、生き残ってしまったら訴訟など無理なのだ。リハビリは待たなすだ。例え金を得ても時既に遅しとなつては覆水盆に返らずだ。時は買えない。しかも訴訟で勝つ保証はない。そこで我々は決断した。「子育て最優先、訴訟は断念」。やはり一時は子を受けてくれた恩人、天使でもあったS医師に刃を向けることは躊躇された。

●疑念

それから十年くらい経った頃だろうか。TVを見ていたから見覚えのある顔が、衆目を集めている殺人容疑事件の弁護士として画面に映っているではないか。暫く思い付くの

に時間がなかった。日弁護士だ。彼とはカルテ保全前に陣痛促進剤投与ミスによる事故の可能性を町医者と一緒に意見聴取に行った。帰りの電車でつり革にぶら下がりながら「流川さんも大変ですね」と言ってくれたあの庶民派の弁護士がTVのニュースに華々しく映っている。

妄想かもしれないが、この時ふと思った。T病院から六名の弁護士「挑戦状」を受けた時に何等かの裏取りがあり、これを機に日弁護士に一気に道が開けたのではないかと。そうでなければ我々弱者の医療過誤弁護から超有名殺人容疑事件のそれへの飛翔は辿れないと思った。

残念ながらこの世界は善悪ではなく勝ち負けである。我々を肥やしに日の当たる所に踊り出たかも知れない日弁護士、六人の守護神にも大事に見守られ医師としての成功階段を上って行ったS医師。障害児の子育てという茨の道を選ばざるを得なかった我々。ただこれが人生の縮図なのだろう。ただこの悔しき思いを少しでも振り払えるとするれば、あの病院で障害を得た娘が一人前に育ってくれる以外道はないのだ。子育て最優先だが一寸先も見えない手探りの人生が続く。

●自立を目指す挑戦

娘を受け入れてくれる幼稚園のある多摩丘陵の山麓への転居、大阪での三カ月の娘単独リハビリ特訓等々、出来る限りの自立に向けての投資は続けた。大学も何とか入学

あの新聞記事のおかげで医師、弁護士以外にも製薬会社や国の評価機関までもが犠牲者を肥やしに華やかな「徒花」を咲かせているのではという疑念が深まった。

あれから二十四年も経つが、これでは我々を含めた犠牲者は浮かばれないと溜息が漏れる。しかしながら現実を受け入れながらも前に進むしかない。我々は娘が障害を持つ身になり急遽この多摩丘陵の地に移り住んだが、ここは里山の豊かな自然がまだ残っており「徒花」ならぬ「野の花」が可憐に咲き誇っている。この地をベースキャンプに障害という見上げる峰々に登攀を繰り返して来た。

近くには頼朝や日蓮や西行も歩いたかもしれないという見晴らしの良い鎌倉古道があり、休日の爽やかな散歩道だ。時空を旅することが出来る素晴らしい道だ。最近古道の三叉路にある古仏にこれまでの感謝の意も込めて花をお供えしている。多摩丘陵の地で出会った各方面の恩師達の御指導なくしてはここまで歩いて来ることは出来なかった。我々が必死で娘の自立を望む姿に共感して頂いたこともあろう。これからも多摩丘陵と恩師達に顔向けが出来るよう「野の花」を胸に踏ん張ってこの大地を歩いて行きたい。

出来た。大学三年生の時、娘が「英語留学に行きたい」と相談してきた。日本語もなかなか人に伝わりにくいのに不埒な目論見だという会話もあったが、娘は単身オーストラリアに行ってしまった。

赤ん坊の頃、麻痺で寝返りも出来ず背中が海老反りとなっていたあの娘から暫くして「現地新聞の第一面に私が乗ったよ」と連絡があった。

「信じられない旅。障害を持つ日本女性が数々の困難を乗り越え、単身で英語の勉強にやって来た。電動車椅子に乗って」

記事は、的確に娘と家族の歩みを記してくれた。健常児と一緒に学ぶ。出来ることは自分でやる。生後三カ月から始めたリハビリの継続。これらは、我々が悪戦苦闘しながら各分野の先生方から指導頂いたものである。「ノーベル賞だね」と私は呟いた。日本ではなく海外で認められたからである。この記事は、将来娘が挫けそうになった時自信を蘇らせてくれる貴重な遺産となったと確信している。そして二年前娘は大学を卒業し、障害者支援NPOで会計の仕事に就いた。簿記の資格にも挑戦中だ。妻が必死にリハビリ、病院、整体とサポートしながらの挑戦は続いている。妻の体も長年の無理が祟りかなりくたびれて来ている。

●多摩丘陵礼賛

受賞の言葉

流川千里

この度は私の作品を社会批評優秀賞に選出して頂き、誠に有難うございます。

貴社の応募要項の「矛盾に満ちた人生への痛切な抗議」の一文に釘付けになりました。

妻の子宮破裂以降、我々家族が辿った手探りの歩みを書き留めてみようという勇氣が湧き起りました。また、この作品を評価して頂き、感謝の気持ちで一杯です。この作品が活字となり、読者に少しでも共鳴して頂ければ、これ以上の喜びはないと考えております。



流川千里

ながれがわ ちさと

1954年生まれ 広島県出身

78 同志社大学経済学部卒業後、
電機メーカー入社

2014 定年退職後再雇用継続中

1年前よりエッセイを書き始める

今回は、初めての受賞

